リ度シ」ト附加ノコト聯盟宛ニハ「在欧各大使ニ轉電シ在欧各公使ニ郵送ア	提案ヲ作ルニアルカ其ノ檢討ニ多少ナリトモ貢献スルコトクモノアル可シ今後ノ問題ハ此ノ主張ヲ具体化セル建設的必シモ無視セサル国際的地方主義ハ更メテ世界ノ視聽ヲ惹
米宛ニハ「紐育ニ轉電アリ度シ」	朝日、外相ノ云フ所ノ聯盟規約運用ノ伸縮性及聯盟機構ヲ
ハ此ノ点ニ関シ如何ナル手腕ヲ揮ハントスルカ	報知、中外ハ別段ノ新味ナシト論セリ
サ	同演説ハ我国民ノ確信トナレル点ヲ代辯セルモノナリトシ
ルハ此ノ際多少注目ス可キ点ナリ支那ヲ如何ニ取扱フ可キ	本大臣ノ議会演説ニ関シ廿二日ノ東京朝日、日日、時事ハ
、確保スル最善ノ方法ナリトシ更ニ熱河問題ニ言	合第二二四號
支三国カ互ニ独立	本省 1月23日後4時30分発
ロ外ニ対スルモノト爲スモノナリ	演說」
得可ク而シテ吾人ハ同演	
シメタルモノナリ外相ノ演	付記 一月二十一日付
レルコトハ内田外相ノ功ト云フ	関する本邦各紙論調について
カ其ノ外交ノ根本方針トスル所ヲ恰モ哲理ヲ説クカ如ク世	第六十四回議会での内田外務大臣外交演説に
日日、外相ノ議論ニ対シ吾人ハ全幅的ニ共鳴ス我国ノ外相カ今議会ノ任務ニ非スヤ	1 昭和8年1月23日 在米国出淵(勝次)大使 〕宛(電報)内田(康哉)外務大臣より
	夕亥政策 船
	
日付索引	日本外交文書 (昭和八年対欧米・国際関係) 日本外交文書 昭和期II第二部第二巻
947	3 南米移民関係
927	2(仏国の南シナ海礁島領有問題
911	1 一般問題
911	十 雜件
781	付 日印会商
724	九(英連邦諸国との通商問題
686	3 蘭印における輸入制限問題
641	2 米国経済復興政策と日米貿易問題
618	1 一般問題
618	八 諸外国との通商問題
564	3 漁業紛争関係諸事件
501	2 北満鉄道をめぐる諸問題

一 外交政策一般

(付 記)

第六十四囘帝國議會ニ於ケル内田外務大臣演説

2

私 基礎ガ確立セラレ、 洲國ニ對スル一切ノ脅威ガ同時ニ帝國ノ康寧ニ關ス テ帝國及帝國臣民ガ、 帝國政府ハ ス リマス。 ハ 一切ノ權益ヲ確認尊重スベキコトヲ約シ、 |政府ト 新ニ設ケラレタ次第デアリマス。 ルト共ニ、 滿洲國内ニ駐屯スルモノナルコトヲ規定シテ居ル 獨立國タルコトヲ確認スルト共ニ、滿洲國ハ ヲ申述ベ Ξ ハ 共同シテ國家ノ防衞ニ當ル 付テ御報告致シマス 玆ニ昨年八月臨時議會以後ニ於ケル帝國ノ重要外交案 卽チ右議定書調印ノ結果、帝國ノ在滿權益ヲ擁護 ノ間ニ議定書ヲ調印致シ、之ニ依テ帝國ハ滿洲國 既定ノ方針ニ基キマシテ、昨年九月十五日滿洲 マシテ、 内外ノ脅威ニ對シ滿洲國ノ安全ヲ確保ス 諸君ノ御清聽ヲ煩シ度イ 東洋ノ平和維持 從來條約其ノ他ノ約定ニ依テ有スル ルト共ニ、帝國政府ノ所見並ニ方 ベク、之ガ爲所要ノ帝國軍 (昭和八年一月二十一 ニ對スル有力ナル保障 且日滿兩國 ト存ジマ 同國内ニ於 ノデア N ニ顧 い滿 ス。 <u>H</u> ル 1

滿洲國ガ其ノ後益々健全ナル發達ヲ遂ゲ、就中其ノ治安ノ

N

コト

ニ付キマシテハ前ニ一言致シマシタ通デアリ

マ

る。

狀況 支那ト 在リ、 居ルノデアリマス。私ハ右ノ如ク滿洲國ガ良好ナル狀態ニ 礎ノ上ニ解決シ、 様ニ及ンデ居ル次第デアリマス。此ノ事實ハ卽チ新國家ヲ 此ノ狀態ガ同國ノ通商貿易上ニハ勿論、 尙序ヲ以テ熱河ニ付テ一言附加へ度イト存ジマス。 承認シ其ノ發展ヲ助成スルコトガ、滿洲問題ヲ堅實ナル基 好イ影響ヲ與ヘテ居リマスコトハ、申ス迄モナク其ノ慶福 ニ至ルベキコトヲ確信スルモノデアリマス。又窮極 當ノモノデアルコト シテ、同國ニ對シテ帝國ノ採ツテ來タ態度ガ極メテ公正妥 ト確信スル ハ滿洲國人ハ固ヨリ、 レテ居リマスコト ケテ行クコト ハ 、支那國民モ日滿支三國ガ各々獨立國トシテ相倚リ相助 ヲ了解スルニ至ルベキヲ信ジテ疑ハナイノデアリマス。 ハ集團的兵匪ノ逐次壊滅スル 其ノ慶福ガ内外人一様ニ及ンデ居ル事實ニモ顧ミマ ノ境界ガ長城デアルコト 帝國政府ノ見解ノ誤ラザルコトヲ如實ニ示シテ ガ、東洋ノ平和ヲ確保スル最善ノ方法ナル 東洋ノ平和ヲ保全スル ハ寔ニ御同慶ノ ヲ、聯盟及列國ニ於テ必ズヤ認識スル 在留邦人其ノ他諸外國人ノ上ニモ ハ歴史的ニ見テ議論ノ餘地 、ト共ニ、 至リデアリマス。 、唯一ノ 財政上ニモ極 著シク改善セラ 方途デアル 而シテ 滿蒙ト ニ於テ レメテ コ

動 シテ近來支那軍隊ガ、 ラ 助 テ 二月南京ニ開催セラレマシタ國民黨中央委員全體會議ニ於 支那ニ於ケル政局ハ引續キ渾沌タルモノアル一方、排日運 條約上ノ義務ニ顧ミ、 責ニ任ズルモノナルコト申ス迄モナク、從テ所謂熱河問題 地方ノ治安ノ維持ハ日滿議定書ニ基キ、兩國共同シテ其ノ 來 べ、 同 國建國ノ經緯ニ徴シマシテモ明瞭デアリ ラレ居ル 會議ヲ通過セル マ ふ 純然タル滿洲國内部ノ問題タルト同時ニ我方トシテモ右 :省内ニ於ケル治安攪亂ノ策動顯著ナルモノアルノミナラ シ 反 |ハ依然緩和ノ兆候ヲ示サナイノデアリマス。 ル キ所デアリ、 ν モノガアル有様デアリマスガ、滿洲國ノ領域ニ屬スル タ各種 Ē 學良麾下ノ正規軍ニシテ國境ヲ越エ、熱河省ニ侵入シ タル旨ノ報道ガアリマシタガ、 資排斥ノ三點ヨリ成ル積極抗日案ナルモノガ提出 北支邊境ニ於ケル軍事行動、東北義勇軍ニ對スル援 ノミナラズ、 ノ情報ニ依レバ、 殊ニ熱河省ガ滿洲國ノ一部タルコト コトハ確實ト認メラル 多大ノ關心ヲ有スル次第デアリマス。 既ニ其ノ一部分ガ熱河省内ニ侵入セ 支那ト滿洲國ト 右積極的抗日案ナル 其ノ後政府 ルノデアリマス。 ノ境界附近 マス。然ルニ最近 殊ニ昨年十 ノ入手致シ 三集中 モ ノガ同 ハ ì 同 セ 而 七

捉ヘテ、 ヲ喚起シ、 見解ヲ、 昨年十月理事會ニ提出セラレ、又之ニ對スル帝國政府ノ意 居ルモノデアリマシテ、此ノ事態ヨリ招來スルコトア 帝國政府ニ於テハ、斯ノ如キ支那ノ狀態ヲ衷心重大視シテ 我方トシテハ右委員會ニ對シテハ素ヨリ、 其ノ後聯盟理事會、總會、其ノ他諸列國トノ交渉ノ機會ヲ 和ヲ確保スベキ唯一ノ方途デアルト云フ帝國政府ノ基本的 御承知ノ通デアリマスガ、 議其ノ他凡有ル機會ニ於テ、 ケ國委員會 ヲ承認シ、之ガ健全ナル發達ヲ助成スルコトガ、 モー般ニ公表セラレテ居ルノデアリマシテ諸君ニ於テ既ニ 見書ハ、 日支問題ニ關スル所謂「リツトン」委員會ノ調査報告書ハ、 キ不幸ナル結果ニ付、豫メ支那政府及國民ノ深甚ナル注意 ツタノデアリ 此ノ意見書ノ趣旨トスル所ヲ懇切丁寧ニ説明シ來 同年十一月同ジク理事會ニ提出セラレ、 各方面カラ敷衍シテ居ルモノデアリマス。 其ノ反省ヲ促サザルヲ得ナイノデアリマス。 ハ本月十六日再開討議ヲ繼續シテ居リ ッマシテ、 昨年十二月一旦休會シタル聯盟十 要スルニ我方ノ意見書ハ滿洲 右意見書ノ趣旨ノ 今後聯盟ノ 徹底ニ努力 且兩者ト 東洋ノ平 7 政府 ス 諸會 ル ガ 九 國 べ ハ

スル覺悟デアリマス。

熊 變更ヲ加 規約ノ テ居ル ニ變則的特色ノ甚ダ濃厚ナルモノアルニ顧ミマシテ、聯盟見書ニ詳述致シマシタ如ク、同國ニ於ケル事態ノ複雑難澁 險デアル ナ ガ之ニ對スル例外タルコトハ出來ヌノデアリマス。 考ヘルノデアリマス。現ニ通常ノ諸國家間ニー般ニ行 ガ支那ニ關スル問題ニ關與スルニ當リマシテハ、 1 好意アル協力ヲ爲スノ用意ヲ有シテ居ルコト多言ヲ要シナ 平和及福祉ニ貢獻セムガ爲ニスル努力ニ對シテハ、十分ニ ヲ 由 ý, 無用 三適用セムト焦慮スル結果ハ實際ニ當嵌マラザル ニ於ケル先例若ハ事情ニ基キ、規約ヲ其ノ儘右ノ ノデアリマス。 「増進スルニ努メ來ツタ次第デアリマシテ、聯盟ノ東洋ノ 來帝國政府 却 國際法上ノ諸原則乃至慣行ハ、支那ニ付テハ著シク 運用ニ十分ノ伸縮性ヲ有セシムルコトハ必然ナリト ニ傷クル テ事態ノ紛糾惡化ヲ來スノミナラズ、 ト考ヘラルルノデアリマス。 ヘテ行ハレテ居ルノデアリマシテ、 ハ聯盟ノ事業ニ對シ誠實ニ協力シ、 コト 然シ乍ラ同時ニ帝國政府ニ於テハ、 Þ ナリ、 世界ノ平和ノ爲ニモ極メテ危 リマス。卽チ歐聯盟規約ノミ 聯盟ノ權威 前述ノ意 其ノ權威 如キ事 Э 聯盟 \mathbb{P} ハ . ト ν

デアリマス。他方ニ於テ日滿蘇三國間ノ圓滿ナル協調ガ甚ダ望マシイノノ協力提携ガ必要デアルコトハ前述ノ通デアリマスガ、又東洋永遠ノ平和ヲ期スル爲ニハ、一方ニ於テ日滿支三國間

4

を丘をに見る見たるとかで見てしたことしていていませんとうで、日滿蘇三國關係ノ爲慶賀致ス次第デアリマス。國トノ間ニ何等不愉快ナル經緯ヲ見ナカツタ次第デアリマテ愼重ナル態度ヲ執リ來リマシタノデ、幸ニシテ今日迄帝蘇聯邦政府ニ於キマシテハ、滿洲事變ニ關シ當初ヨリ極メ

ガアレ 共産軍ノ跳梁トノ爲ニ苦ンデ居リマスル揚子江沿岸並南支 當否ニ付テハ暫ク論及致シマセヌ。 マ 1 復交問題ニ伴フ一現象トシテ、萬一ニモ發生スル様ナコト 一帶ノ情勢ニ、更ニ赤化ノ氣勢ヲ添ヘルガ如 般ニ於ケル赤化運動ガ、 最近蘇支兩國間ニ國交ノ恢復ヲ見ルニ至リマシタ爲東洋全 カラウカト懸念スル向モアリマスガ、 ス。 點ニ付帝國トシテ深甚ナル注意ヲ怠ラヌノハ勿論デアリ バ、之ハ東洋平和ノ爲由々シキ事柄デアリマス。 今後一層活潑ニナル様ナコトハナ 唯既ニ共産黨ノ活動ト、 私ハ玆ニハ右見方ノ キ事態ガ蘇支 此

尙此ノ機會ニ日蘇不可侵條約ノ問題ニ付テ一言致シマスレ

デ 現 等ニ付マシテハ自ラ種々ノ見解ガ有リ得ルノデアリマシテ、 此 卜 囘答致シタノデアリマス。 テ ヲ キ形式ヲ與ヘルト云フ問題トナリマスルト、 シテモ何等疑ハナイノデアリマス。 テ、 生ズルニ至リマシタノハ御承知ノ通デアリマス。 ハナイコトハ勿論デアリマシテ、 ト 不可侵條約ノ商議締結ヲ行フニハ、時期未ダ熟シナイモ ノ岐レテ居ル事實ニ顧ミマシテ、結局現存條約以外改メ 國政府ニ於キマシテハ、 ニ昨春蘇聯邦政府ヨリノ提議以來、各方面ニ各種ノ ノ實際關係ニ對シ、更ニ兩國間ノ不可侵條約ト云フガ如 認メマ 我方ガ蘇聯邦ニ對シ聊カモ侵略ノ意圖ヲ有スル シテ、 昨年末其ノ趣旨ヲ以テ一應蘇聯邦政府ニ 本問題ニ關シ、 尤モ右様囘答ヲ致シマシ 唯此ノ精神、 蘇聯邦政府ニ於テモ、 斯ノ如ク幾多議 其ノ時期方法 此ノ規定、 タ 議論 ν モ 1 バ

於ケル

レバ

元來兩國相侵サザル

コト

ハ、先年北京ニ於テ調印

セ

ラ

 \mathcal{N}

不戰條約ノ規定スル所ナルノミナラズ、其ノ後兩國間ニタル日蘇基本條約ノ精神デアリ、又兩國共ニ調印シ居レ

實際ノ關係、殊ニ只今述ベマシタル最近ノ事態ニ徴

甲級巡洋艦ノ隻數縮減、乙級巡洋艦及驅逐艦ノ總噸數縮減 提案ヲ進ンデ會議ニ提出致シマシタノハ 國政府ガ世界海軍軍備ニ對シ、重大ナル縮減ヲ齎ラスベキ ラ會議ノ成功ニ努力ヲ傾ケツツアルノデアリマス。 至リマシテハ、終始一貫動カナイノデアリマス。 容易ニ一致ヲ見ルニ至リマセヌ。然シ乍ラ、元來軍縮事業 ガ、同會議ハ世界各國ヲ網羅セル未曾有ノ大會議デアリ 亘リ、各種重要案件ニ付討議ヲ進メツツア 右提案ハ各種艦船ノ艦型縮小、 ラナイノデアリマス。 リマシテ、 ミナラズ、 ハ平和事業トシテ、國際聯盟ノ重要ナル任務ノ一デアル ノ利害關係モ亦極メテ複雑ナルモノガアリマスカラ、 シテ、各參加國ハ各自ノ國防ノ安全ヲ庶幾シ、自然其 ノ會議ニ於キマシテモ、 現下世界各國ノ最大關心ヲ有スル問題ノ一デア 該事業ニ對スル帝國政府ノ熱誠ナル寄與協力ニ 我全權ハ各國代表者ト協力シテ專 航空母艦ノ全廢、 ì 此 ルノデアリ ノ目 從テ今次 主力艦 的 舊臘帝 Ξ 今尙 つ 〕 間 外 7 汲 テ 1 マ ス

一 外交政策一般

此

一般軍縮會議ハ昨年二月壽府ニ開會以來、

陸海空ノ三軍ニ

佛伊

1

五箇國ヲ通ジマシテ、

總計約百三十萬噸

1

縮減ヲ見

日英米

5

艦ノ全廢並主力艦及甲級巡洋艦ノ縮減ノミニテモ、

等ヲ主張スルモノデアリマシテ、

之ニ據リマスレ

バ

ノ點ニ付何等誤解ナキコトヲ確信スルモノデアリマス。

views and policies of the Japanese Government concerning Session of the Diet in August last and to state the questions affecting this country since the Extraordinary developments which have occurred in major foreign I have the privilege now to report on the latest 7

at the 64th Session of the Imperial Diet The Address of Count Uchida Minister for Foreign Affairs January 21st, 1933

滑ト文化ノ融合ト 對スル帝國ノ提案ノ如キモ、均シク同一ノ精神ニ出デテ居 度モ、 根 國家トノ間ニモ最モ親善ナル關係ヲ保持シ、 想ヲ實現スベキ階程ヲ辿ラム ルノデアリマス。帝國政府ハ敍上根本精神ノ下ニ、 タ滿洲問題乃至日蘇關係、又ハ聯盟ニ對スル帝國政府ノ態 デアリ又覺悟デアルノデアリマ :本精神ハ、實ニ玆ニ存スルノデアリマス。前ニ述ベマ 右精神ニ基キタルモノデアリマス。將又軍縮會議ニ 1週リツツ、 コトヲ期スル 世界人類ノ一層崇高ナル ス。 明治以來ノ帝國外交ノ モ ノデアリ 以テ通商ノ圓 何 レ マ ス。 理 1 シ

以テ、 デアリ 保シ、 帝國ノ ス。 其ノ方面ノ平和ヲ現實ニ維持スル爲ノ支柱ナルコト 則 實 ス 又世界ノ何國トモ事ヲ構ヘントスルモノデハアリマセヌ。 ナルヲ認ムルト共ニ、東洋ニ於テハ帝國ノ建設的勢力ガ、 聯盟規約中ニ地方的了解ノ尊重ヲ規定シテ居ルコト N テ平和ノ維持ヲ現實ニ可能ナラシメツツアル勢力ヲ尊重ス 應シテ適宜伸縮性ヲ有セシムルト同時ニ、 府ノ所見ニ依リマスレバ、現下國際社會ノ實情ニ顧 帝國外交ノ根本義ガ東洋ノ平和、延イテ世界平和ノ 存スルコト ルト コトガ極メテ肝要ナノデアリマス。 (ノ普偏性ヲ認メツツ、而モ之ガ運用ニ當ツテハ實際ニ適 ノ平和ヲ招來セムガ爲ニハ平和ノ維持ヲ目的トスル諸原 帝國ハ世界ノ何處ニ對シテモ領土的野心ヲ有シマセヌ。 同方面ノ平和維持ヲ圖ルベキモノト考フルノデアリマ マス。 - 共 こ、 依テ以テ世界平和ノ維持ニ貢獻セムトス 企圖スル所ハ國際正義ニ基キ、帝國ノ生命線ヲ確保 右目的達成ノ爲貢獻セム ハ多言ヲ要シナイ所デアリマス。 而シテ東洋ニ於ケル其ノ權威ト其ノ實 其ノ隣接諸邦ト協力提携シテ東洋ノ康寧ヲ確 ٢ スル 私ハ此ノ意味ニ於テ、 솏 世界各方面ニ於 日本國民ノ 而シテ帝國政 ル外ナイ -ヲ認識 111 ,確保ニ ガト 1 ,信念 、賢明 ヲ シ 眞

世界經濟界ノ趨向ヲ觀マスルニ、四十餘ケ國ニ亘ル金本位 シテ、 義ヲ行フニ至リマシタ結果、 ヲ確信スルモノデアリマス。 實際的ノモノデアル 究シマスルニ於テハ、我提案ノ極メテ公正合理的ニシテ且 又一方ニ於テ我提案ハ、 シ右兩者ニ對シ、 防禦的勢力ヲ强ムベシトノ原則ヲ基礎トスル 海軍國ノ安全感ハ著シク害セラルルニ至ルノデアリマ ニ比シ一層大ナル ニ承認セラレタ 4 障碍以外ニ、各國競ツテ高率關稅、輸出入ノ制限禁止等 度ノ停止、 レテ居ルノデアリマスカラ、 ニ至ル計算デアリマス。我提案ハ今次ノ會議ニ於テ 通商上ノ障壁ヲ設ケマシテ、 此 ノ原則ニ據リマスレバ、優勢海軍國 銀價ノ暴落、 ル軍縮ノ各原則、 同一率ノ縮減ヲ行フトシマスレバ、 犧牲ヲ拂フベキハ當然デアリ (コトヲ、 關係各國ノ主張ヲ能フ限リ考量ニ 爲替相場ノ混亂等ニ依ル貿易上 從來折角健全ナル發達ヲ續ケ 克ク了解スルニ至ルベ 各國ニ於テ我提案ヲ十分攻 所謂產業貿易上ノ鎖國主 就中攻撃的勢力ヲ弱 ハ劣勢海軍國 モノデアリ マシテ、 キコ 、ス。 劣勢 × 一般 若 ٢ Ż 所以デアリマシテ、此ノ大原則ノ圓滑ナル運用ガ妨ゲラ テ、世界各國民ガ有無相通ジ、共存共榮ノ理想ヲ達成ス シタイ意向デアリマス。 マ 力シタイ方針デアリマス。 ノデアリマス。 難ク、眞ノ世界ノ ルニ於キマシテハ、 シ各國間物資交易ノ自由ハ、

入

ル

移住往來ノ自由

卜 相俟チ

マ

6

N ル シ

制

繁榮ト平和トハ之ヲ期待シ得ザ 國際間ノ共存共榮ハ之ヲ實現スル 現ニ近ク開カルベキ世界經濟財 N ノ氣運ガ顯著トナル ス N 方策 ルニ 我國ト コト ニ至 Ξ 至 就 N

帝國政府ニ於キマシテモ旣ニ同會議ノ準備委員會ニモ參加 致シマシテモ此ノ種ノ國際的努力ニ對シマシテハ進ンデ協 テ、熱心ナル檢討ヲ行ハントス シ、各國ト共ニ各種ノ豫備的研究ヲ進メツツアル 政會議ノ如キモ亦上述ノ趣旨ニ基クモノト考ヘマスルカラ、 リマシタコトハ、誠ニ喜ブベキ現象デアリマシテ、 幸ヒ最近ニ至リ、此ノ世界的經濟不安ヲ排除 シテ、今後トモ同會議ノ成功ニ對シテハ衷心ノ援助ヲ致 ノデアリ

見解 最後ニ私ハ、 以上當面ノ外交問題ニ付御淸聽ヲ煩シタ次第デアリマスガ、 卅ニ 關シ、 右ニ述ベマシタル所 一言致シ度イト存ジマ ノ根底ヲナス帝國政府 る。

ニ至リマシタコト

ハ誠ニ遺憾ニ堪ヘザル所デアリマス。

蓋

ッ

ツアリマ

シタ通商自由ノ大原則ガ、

玆ニー大逆轉ヲ見ル

-----外交政策一般

them.

are view is pledged to respect all the rights and interests of established for the maintenance of peace in the Far country alike from internal and external dangers. It Japan in affords full protection to the rights and interests of and for the stationing in its territory of the Japanese once a direct bearing upon the welfare of Japan, provisions by treaty or through other agreements. Moreover, in Japan and her subjects in that country secured either Manchoukuo as an independent state, while Manchoukuo year. By this instrument Japan has definitely recognized means that a new and effective guarantee has been troops necessary for that purpose. The protocol thus Government of Manchoukuo on September 15 last Government signed a protocol concurrently with the also introduced for the joint defense of that state In pursuance of their settled policy the Japanese of the fact that any menace to Manchoukuo has at Manchoukuo and insures the safety of that

East.

8

League of Nations and the governments of the Powers thereby accruing to all the peoples of the world, the growth of Manchoukuo and the universal advantage Far East. I am convinced that in view of the sound basis, and for the establishment of peace in the way for the solution of the Manchurian issue on a the new state and to assist its development is the only ernment have not erred in their belief that to recognize Here we have a concrete proof that the Japanese Govcommerce and finances of Manchoukuo and the resultant situation has naturally reacted favorably upon the lation or dispersal of the major hordes of bandits. peace and order consequent upon the successive annihiresidents equally with the Manchurians themselves. benefits have been shared by Japanese and other foreign marked improvement has been achieved in its internal made rapid and healthy progress and especially that a It is extremely gratifying that Manchoukuo has auspicious This

will eventually recognize the fairness and justice of the position we have taken up with regard to Manchoukuo. Nor have I any doubt that in the end the Chinese themselves will be brought to regard mutual aid and co-operation between Japan, China and Manchoukuo, each as an independent state, to be the best means of insuring peace in the Orient.

I may add at this point a few words with reference to Jehol. Viewed historically, there is no room for doubt as to the fact that the Great Wall marks the boundary separating China from Manchuria and Mongolia. Particularly in the light of the circumstances leading to the establishment of Manchoukuo, it is evident that the Province of Jehol constitutes an integral part of the new state. However, manoeuvres for creating disturbances in that Province have of late been notoriously rife, and some contingents of the regular troops under Chang Hsueh-liang have crossed the border into the Province.

> affair for Manchoukuo, Japan is of course bound by the recent protocol to join forces with that country in the task of maintaining peace and order throughout its territory. The question, therefore, in view of this treaty obligation, is a matter of serious concern to the Government of Japan.

Armies" Congress. As a matter of fact, Chinese troops are of movement was actually adopted by the Kuomintang sn Information obtained from various sources since leads along the North China frontier, support for the was last, a proposal for a positive campaign against Japan of the Kuomintang, convened at Nanking in December the plenary session of the Central Executive Committee shows no sign of abatement. It was reported that during continues as ever, while the anti-Japanese movement to believe that this proposal for a positive anti-Japanese submitted, which called for military operations As for China, the political confusion in that country of the North East, and an anti-Japanese boycott. "Volunteer

late in process of concentration near the borders of Manchoukuo, and some of them have, as I have already stated, invaded the Province of Jehol. The Japanese Government cannot look upon such a state of affairs in China without the gravest apprehension. We are compelled to warn the Government and people of China against the unfortunate eventualities that may arise from the situation, and to invite them to think seriously before proceeding further in that direction.

The report of what has come to be called the Lytton Commission on the Sino-Japanese question was submitted to the Council of the League of Nations in October last, and the "Observations" of the Japanese Government on the same report were submitted in November to the same body. Since these documents were both made public, their contents are already known to you all.

Our Observations are simply an elaboration from different angles of the fundamental view of the Japanese Government that the peace of the Far East can be

> secured only by recognizing Manchoukuo and assisting it to achieve a healthy growth. Our Government have seized every occasion at the Council and the Assembly of the League and in the course of negotiations with other governments to expound this thesis of the Observations with the utmost care and thoroughness. We will persist in our endeavors not only as regards the special Committee of Nineteen which resumed the discussion of the Sino-Japanese dispute on January 16 but at the various meetings of the League and at every possible opportunity until the above thesis is thoroughly elucidated and understood.

> > 10

It is hardly necessary to say that the Japanese Government who have always extended their hearty co-operation to the League and devoted their best efforts to the enhancement of its prestige, are ready now as ever to collaborate fully and in the friendliest manner with that body in its efforts to contribute to the peace and prosperity of the Far East. However, the

the Ë the 5 aggravate the situation, and injure needlessly the IS. the analogy of an apparently similar case or situation remain an exception to that rule. Any attempt to apply China. in practice considerably modified when applied principles of international law and usage, governing conditions of that country. In point of fact, various Covenant in view of the exceptional and abnormal elasticity should be allowed in the operation of the Japanese Government believe that as long as the League prestige of the League, inflicting thereby a severe blow is concerned with questions relating to China, a certain the cause of universal peace vain and unrealistic. It will only complicate European affairs, is bound to fail. Such an attempt ordinary relationships between different states, are Covenant to the abnormal situation in China The Covenant of the League cannot alone and on to

> of Japan, China and Manchoukuo are essential. At the same time, harmony and collaboration between Japan, Manchoukuo and the Union of Soviet Socialist Republics are equally important.

Fortunately, the Soviet Union Government ever since the beginning of the Manchurian Incident have maintained an attitude so cautious that nothing unpleasant has occurred to mar their relations with Japan. This is a matter for congratulation for the mutual relationship between Japan, Manchoukuo, and the Soviet Union.

There are those who fear whether the recent restoration of diplomatic relations between the Union of Soviet Socialist Republics and China might not add vigor to communist propaganda throughout the Orient. This is not an occasion for me to pass judgement upon this sort of opinion. However, should the red movement in the Yangtze Valley and South China, which have long suffered from the activities of communists and the depredations of communist armies, gain in strength as

co-operation, and united efforts, as I have said before,

For securing permanent peace in the Orient the

a result of the Sino-Russian rapprochement, that would be a serious menace to peace in the Orient, against which Japan must certainly be on guard.

12

date. they and Сf. since last spring when the proposal was first advanced principle and this actual relationship in a formal treaty years and especially during the trying period of recent actual relations between the two countries during past living force, as has been fully demonstrated by the the by the Soviet Union Government. You know how varied opinion has been on the matter Peking and provided for in the anti-War Pact to which Russo-Japanese Basic Treaty signed some years between the two countries is not only embodied in the non-aggression, views vary as to time and form. the Soviet Union. The principle of non-aggression question of a non-aggression pact between Japan are both signatories, Only when it comes to the matter of clothing this may take this opportunity to say something on but has shown itself to ago at be a

> In view of the divergent opinions stoutly maintained in different quarters the Japanese Government have concluded that time has not yet arrived for negotiating a non-aggression pact superimposed upon the treaties now in force. Our reply to that effect was sent to the Soviet Union Government toward the end of last year. That does not mean, of course, that we entertain the remotest intention of aggression in the Soviet Union, but quite the contrary, and I am sure that our position is fully understood and appreciated by the Soviet Union Government.

The General Disarmament Conference, since it first met at Geneva in February last, has continued its deliberations on various important questions covering the land, sea and air forces. This is a conference of unprecedented magnitude, attended as it is by the representatives of practically all the nations of the world. Because of the natural solicitude of each and every participating Power for its own national defense,

the armaments of the world calculated to colleagues of other nationalities in order to bring the exerting their best efforts in collaboration with their the Japanese Government to accord sincere co-operation Government have spontaneously submitted a proposal Conference to a successful conclusion, and that with this policy that our delegates now at Geneva are and full contributions to the enterprise. It is in accordance which is at present engaging the greatest attention on missions of the League of Nations, but it is a matter an enterprise for peace, is not only one of the principal as yet reached no general agreement. Disarmament, varied interests which this entails, the Conference has and the consequent complications and conflicts of part of the Powers. It has always been the policy effect a drastic reduction in the naval our сf. as

This proposal of ours covers among other items a reduction in size of vessels of various classes, the abolition of aircraft-carriers, a reduction in the number

far as possible all the points insisted upon by the various confident that since our proposal takes into account as equal ratio, the sense of security on the part of the one. If the two were both to reduce their navies in an made by a superior naval Power than by an inferior iŧ power for defense increased. From the same principle principle that power for attack should be reduced and accepted at the present Conference, particularly the based that a reduction amounting altogether to 1,300,000 capital ships and A-class cruisers alone, it is calculated of capital ships and A-class cruisers, and a reduction of latter would be unduely and unjustly diminished. the United States, France and Italy. Our proposal is tons will be realized in the navies of Japan, Great Britain, of aircraft-carriers and the reduction in the number of destroyers, according to which, through the abolition the total tonnage allotments of B-class cruisers and logically follows that greater sacrifices should be upon the principles of disarmament generally I am

Powers concerned, a thorough examination will finally convince them of its practicability as well as of its equity and reasonableness.

and imports. It is to be greatly regretted that as a result of putting limitations or prohibitions on exports and general progress and prosperity. Whenever this cardinal freedom of travel and residence the very foundation goods between nations constitutes along with that entirely reversed. The principle of free exchange cherished principle of the freedom of trade has been everywhere in trade and industry, the universally this policy of the closed door which is now practised artificial trade barriers by raising customs tariffs or we see that all countries are busily engaged in erecting than forty nations, the collapse of the price of silver, ð world, in addition to the obstructions to trade created the suspension of the gold standard system by more the confusion existing in the exchange markets, To turn to the economic field throughout the by of of of

> principle ceases to operate smoothly, there will be no means of realizing the common well-being and prosperity of all nations and no hope for the true progress and peace of mankind.

make that conference a success. preliminary studies. We will do all in junction with other governments with various kinds of of the Preparatory Committee, are proceeding in and our Government, participating in the conference future, is an expression of this universal aspiration, Financial Conference, to be convoked in the near undertaking. For instance, the World Economic and prepared to lend a willing hand in this kind of international apparent everywhere. The Japanese Government are ridding the world of its economic ills is becoming more conduct earnest investigations as to the best means of However, it is encouraging that the desire our power conð ð

Thus far, I have spoken on various aspects of the foreign questions confronting Japan. I desire to conclude

my address with a few words on the basic ideas of the Japanese Government which underlie all that I have stated above.

Government believe that any plan for erecting an edifice сf in universality of the various principles subserving the In of peace in the Far East should be based upon the understandings shall be respected. In this sense, our peace possible in various parts of the world. The League ð cause of peace, a due and proper elasticity corresponding of the realities of the international situation, it is essential the view of the Japanese Government, that in the light Orient, and as a corollary, that of the world. Now it is respect those real forces which are actually rendering of Japan's foreign policy is to secure the peace of the Nations Covenant very wisely provides that regional the exigencies of actual conditions should be allowed order to obtain true peace that while accepting their practical application. It is also imperative It is needless to say that the fundamental principle the ť

Japan' s She by this all-pervading spirit, may maintain the friendliest relations, and to the activities of the League of Nations Such is the spirit behind the action we have taken in ð contributes her resources, her power, and her prestige resolve, and our duty as a nation, for the peace of the Orient and of the world. It is our and to work hand in hand with the neighbor nations such means as will accord with international justice, has no intention to pick a quarrel with any country. entertains no territorial designs anywhere in the globe; mainstay of tranquillity in this part of the world. Japan recognition that the constructive force of Japan is the hope of the Japanese Government that Japan, guided has been inspired by the same idea. It is the ardent in the Far East. Our recent proposal for naval disarmament regard to the Manchurian question, to Russo-Japanese that end. Such has been the underlying spirit of only desires to ensure her national existence by foreign policy ever since the first days to see that of Meiji. she she

ト」聯邦經由ノ報道ハ歐米殊ニ米國新聞界 「ダンチッ カ 三於 ノ立場 _ 所ナ Ξ ・ン Ł ワ テ IJ Ň コ ル 討議ヲ 張ノ如ク所謂「リットン」報告書ヲ審議シテ解決案ヲ見出 十一月二十一日 タリ 國代表、 他ノ機會ヲ利用シタルハ勿論巴里及「ジュネ 傳ヘラルルヲ耳ニシタルヲ以テ臣ハ新聞記者トノ會見其ノ 牒スルコトト爲リタリ臣ハ右ノ手續ニ對シ曩ニ政府訓 利ナル言動ニ出ツル西班牙代表「マダリアガ」等トノ會談 スノ意嚮ヲ有セス臣等ノ努力ニ拘ラス同月二十八日ヲ以テ ヲ首肯セ ノ機ヲ以テ帝國ノ立場ヲ明ニシ譲歩ノ報道ノ根據ナキコト ニ於テ聯盟事務總長、 承認ノ立場ヨリ何等カノ譲歩ヲナス模様ナルヤ 巴里ニ到著スル 定ヲ見タリ 同シク臣カ首席代表ト ク又我方主張ニ拘ラス日支紛爭カ總會ニ移サ 打切リ同報告書ニ理事會ノ議事錄ヲ附シテ總會ニ移 理事會議長タル愛蘭土自由國代表及兎角我方ニ不 シメ豫メ相互思惑ノ餘地ナカラシ Э ヤ リ開カ ジュ 英佛伊等大國代表、 シテ其ノ討議ニ加 V ネーヴ」ニ於テ帝國政府ハ滿洲 タル理事會ハ最初 ハ ムル 總會議長タル白 N **)** ヴ」 Ξ \sim N リ帝國 コト キ ノ報道頻ニ ル 場合 コト ノ兩地 Ξ 1 努 メ Ξ =

決

ハ

國

次テ臣ハ N 十五周年記念觀兵式ノ光景ハ實ニ臣ノ忘ルル能ハサル 者及「モスコウ」ニ在ル本邦新聞特派員等ノ遺憾ナキ協力 其ノ目的ヲ達シ得タリト信ス右ニ關シテハ同行ノ我新聞記 ニ貧フ所多シ尚十一月七日赤色廣場ニ於テ目撃セル革命第 シモノトノ印象ヲ與ヘンコトヲ期シ此ノ點ニ於テ稍完全ニ キモ同時ニ英米ニ對シ挑戰的ナル全部的提携ハ成立セサリ ノ視聽ヲ惹キタルカ臣ハ當初ヨリ此ノ行ニ依リ或程度迄日 臣ノ「ソヴィ 「ソ」接近シ滿洲國問題ニ付或種ノ了解成リタルニ相違ナ コトヲ附記セント欲ス 「ワルソウ」及伯林ニ各一日ヲ費シタル エ

開カルヘキ理事會ニ臨ム對策ヲ議シタルカ其ノ際臣 及 問 日支問題ノ 長岡佐藤兩代表及代表代理ト會同先ッ十一月二十一日 ソウ」ニ於テハ先年巴里媾和會議ノ際臣カ N 決心ヲ告ケ暗ニ其ノ好意的支持ヲ促シタリ巴里ニ於テ ニ意ヲ用ヰ又伯林ニ於テハ獨逸國外相ニ對シ帝國 關係アルヲ因由トシテ聯盟ニ於テ我立場ノ支持ヲ得 題ニ關シ波蘭國代表等ニ多少ノ注意ヲ與ヘ斡旋ヲ爲シタ 關スル限リ帝國代表ト シテ右理事會ニ出席ス

付候條午後一時十分参内候様御逹相成度候

쥕 記 and cultural intercourse, and pursue the path leading relations with all nations, promote both commercial

to the realization of the higher ideals of humanity

編

注

本内田外務大臣演説文は一月二十七日付普通合第七

五号として情報部より各在外公館に送付され

た

洋 右

共ニ若シ出來得ヘクンハ「ジュネー 臣 關シ「スターリン」ノ個人的顧問トシテ其ノ勢力外務當局 日間滯在シ「ソヴィエト」聯邦政府外交當局及極東問題ニ 和七年十月二十一日輦轂ノ下ヲ辭シテ任ニ「ジュネーヴ」 代表トシテ長岡春一及佐藤尚武ト共ニ參列 府 ヲ凌クト稱セラルル「ラデック」ト會談スルノ機ヲ得タリ ニ赴クニ當リ途ヲ「シベリヤ」ニ取リ「モスコウ」ニ兩三 日支問題討議ノ爲招集セラレタル タ テ不侵略條約ヲ締結スル ヲシテ滿洲國ヲ承認セシメントスルニ在リタル ハ ノ結果及之ニ依リテ感得シタル雰圍氣ニ鑑ミ帝國政府ニ於 N ノ滿洲國承認ハ之ヲ迅速ニ得ラレサル ノ「ソヴィエト」聯邦通過ノ目的ハ同國ノ近狀ヲ知ルト **滿洲國問題ニ深ク關與セサ** ト同時ニ聯盟カ如何ナル態度ニ出ツルニモ ノ用意ナキ限リ N ヘシト 國際聯盟臨時總會ニ帝國 ヴ」到著以前同國政府 ~ 「ソヴィ 確信 ヘキコトヲ確メ得 1 臣 大命ヲ拜シ昭 ラモ カ敍上會談 セヨ - エト」政 得 同政府 タ Ŋ.

2

昭

和8年

-4 月 24

日

内田外務大臣宛湯浅(倉平)宮内大臣より

奏につい

τ

付

記

四月二十八日上奏 松岡代表復命書

国際連盟臨時総会松岡代表帰朝に際し参内上

右頭書

)

會議ニ参列ノ處今般帰朝ニ付來二十八日拜謁被仰

國際聯盟總會臨時會議代表者

松岡洋·

右

宮發第二〇七號

4 亰

24日接受)

昭

和八年四月二十

四

Π

務大臣伯爵

内田

康哉殿

宮内大臣

湯淺

倉平

囹

17

Ż

主

ノ態度ニ出テサリシ

カ理 令

 \sim

次第モアリ實質的ニ之ヲ阻止スル

外交政策一般 ___

解セシメ 又 二 多ノ 對 問 對 或 テ メ 米國ニ於テハ近ク政府ノ更迭アル 的言動カ我國民感情ヲ テ又滿洲 ト多言ヲ要セサル 且賢明ナ 的 米 タ 此 題ノ為ニ シ其 日政策ハ 1 ン リ ニ非聯盟國 ル ノ誤ラサ 國ノ參加 參加 異議アルヘキコトハ素ヨリ臣等ノ夙ニ認メタ ノ事務總長ノ努力カ英國ノ政策ヲ反映スル ٢ 裏面 旦和協委員會ヲ成立セシム モ 1 シテ懸命ノ努力ヲ試ミタル 1 、ニ非サル 自發的ニ招請ニ應セサラシムル Ξ ヲ喜ハサル 事變勃發以來米國朝野 ル 和協委員會へ 委員會ノ成立ヲ不可能ナラシムル IJ ラ拒 必スシモ共和黨政府 ヲ思ヒ臣ニ於テ卒直ニ敍上ノ意見ヲ外務大臣ニ ル 然 コトヲ諄々説得ス ノ招請 マサル ル コト ヘシ本問題カ聯盟構成 ヘキ方法ヲ以テ盧 ヘキハ ト爲シ正面 ノ刺戟シタル ノ參加 ヲ感シ且若シ帝國政府 ヲ得サル 充分理由アル 1 コノ帝國 N 日米國交ニ非ナ 國内事情アラハ ルニ於テハ必スヤ帝國 ノ斯レト同シカラサ ヨリ之ヲ拒 コト コト ノ事實ニ顧ミ我國民カ同 1 途開 心坦懷直 ハ疑 ト爲リ民主黨政府 ノ行動ニ對スル パコトナル カル ノ根本ヨ 様措置ス 1 マ 餘地 ニ 於テ 飽 ヘク此 接 サ コトハ策ノ モ N Ж ル 名義ヲ抽象 、モ其ノ後 ル所 IJ 1 テ ノ態度 所 國 ル ,見テ幾 ク而 ナ ノ際本 ノ妥當 Ű 政 N 非難 Ξ 「ヲ了 の迄 \mathcal{N} 府 1 \sim 得 主 クラ シ コ F シ Ξ

意味ヲ 拘 四 ヲ ナク二月二十一日ニ至リテ再開セラレタ シテ聯盟ノ態度此 ナルカ時ハ恰モ英國カ從來帝國ニ對シ示シ來レ 十四 「リ爾後我方ニ於テ幾多ノ讓歩ヲ爲シタ ノヨリ逆轉シテ十九人委員會最初ノ原案ニ立返ルコト 除キ全會一致ヲ以テ右報告案ヲ採擇シタル 「ソ」招請ノ ラス同月二十四 以テ故意ニ ノ外ニ十二ノ缺席國アリ其ノ 問題カ打切ト 退席シタル南米ノ H ノ頃ヨリ俄然硬化シ米「ソ」招請 ノ總會ハ我方ノ反對及暹羅代表 爲 リタ 方ニ N 數國ヲ含ミタリ ハ本年 ハ ル總會ニハ規約第 ルモ遂ニ妥協ノ途 反對又ハ カ當日投票國 一月 N 中 時期 好 (玆ニ於 棄權 旬 ノ棄權 Ξ 關シ 意 Ì N = 的 コ 卜 1

訓令ニ則リ本件反對ヲ固執 容ルル所ト爲ラサリシヲ以テ爾後我代表部 開陳シタ ルモ右ハ前 記參加 デオ不可 シ タル 結果 ŀ スル理由ニ因リ 八遂ニ ハ飽ク迄政 聯盟ヲシテ 政 府 府 本 1)

我代表部苦心ノ結果ニ成ル所謂「ドラモンド」杉村案ナ 態度ヲ後ニ述フルカ如キ諸種ノ事情ヨリ變更シタル 米 件ヲ斷念セシムルニ至レリ 十五條第四項ニ依ル報告書案提出セラレ臣等最後ノ努力ニ 爲 モ テハ帝國ノ主張ヲ認メ之ヲ撤囘スルモ他ノ點ニ付テハ折角 ト

盟ニ代リ帝國ノ滿蒙問題ニ關スル國策ノ根本ニ對シ否認的 右決議案中帝國政府カ最强硬ニ反對シテ結局聯盟ヲシテ (後ニ議長宣言ト爲リタリ)案ノ修正ニ關スル交渉ニ ヲ決議シ一旦休會シタリ而シテ十九人委員會ハ十二日 之ヲ代表部ニ内示シ來リ爾後問題ハ決議案及理由 |合十五日ニ至リテニ箇ノ決議案トーノ理由書案ト 以テ解決案ノ作成ヲ所謂十九人委員會ニ付託 會一般討議中英國代表ヲ始メ數多ノ代表ニ依リ 經過ニ付テハ既ニ外務大臣ヨリ其ノ都度上奏 ヨリ開カレ八日迄一般討議ヲ行ヒ 和協委員會ニ招請ス 支紛爭解決ノ爲規約第十 一見單純ナル手續問題 「リットン」ヲシテ聯 ン」ヲ招 報告書ニ シ 臣 ス \sim 九 5 集中 抗 致シ シ ル ヲ 日 五撤 書 н Ξ 爭 テ Þ コノ ヲ去ラ 代表者ニ於テハ帝國ノ行動ヲ以テ嚴格ニ聯盟規約、 題 唱 始 如 國際約定尊重ノ一保障存スルコトヲ誇示シテ後ニ述フル 戦條約ノ首唱國タ 約等ニ照スト テ任命シタル行懸アリ從テ和協委員會ニモ何等カノ形ニ於 盟カ關係シテ以來嘗テハ理事會ニ米國代表者ヲ傍聽者 \mathcal{N} 聯盟外ニ立 圖ニ在リ ル例外的行動トシテ已ムヲ得サリシモノト テ之ヲ招請セサル テ招請シタル ラ米國ノ參加如何ニ轉化シタルカ其ノ眞意ハ日支紛爭 ル 「米國ノ コトヲ好マス聯盟亦之ニ重キヲ置カサルニ至リ問題 モ 1 \sim キ小國側 ラ 「ソヴ 永續的解決ニハ レタ ン 加 卜 8 1 入ヲ以テ其ノ使命ノ ルモノノ如シ更ニ事務總長ハ ノ不安ヲ除キ妥當ナル ツモ共ニ滿蒙問題ニ利害關 ル所ナ ス エト ルニ先チ此 キハ異論アルヘキモ支那 コトアリ ル米國 N ヘカラスト爲スノ外聯盟事務總長及大國 」聯邦ハ 兩國 力 文調査委員會ニハ米國 其 一ノ參加 カ和協事業ニ參加スル Ī ノ機ニ於テ豫テノ 曩ニ述ヘタ ---應 ナカ __ ト 1 理 解決ニ導カン N 由 シ來リ今ヤ期滿 1 N \sim トスル 係ヲ有ス カラス 就任以來十三年終 混亂狀態ニ因 如ク紛爭ニ關 ·認 メ 目 (所蓋シ 的 人ヲ委員 コト 1 タ ト N ニー歩ヲ ・スル · 云フ ル ヲ 際尙不 不戰條 빐 兩國 二依 チ ・ テ任 ノ意 亩 ĥ 與 Ξ テ 1 Ξ ハ 审 力 IJ ス シ シ 聯 ス 在 問 ハ

總會

ハ

十二月六日

二日ニ及ヒ漸クニシテ之ヲ阻止スルコト

ヲ得タリ

斷定

ヨ下サシメントスル

ニ等シキモノナルヲ以テ

對

スル

意見書及臣ノ論議ヲ葬リ去リ

如

キ外觀ヲ裝フモ

實ハ帝國政府ノ ノ提案アリ右ハ

ーリッ

トン」

テ

其ノ意見ヲ求ムル

事會議事ノ進行中調査委員會委員長

リ

ッ

 \mathbf{F}

18

會議ヲ

決

シ 會

シ

カ其

ラ

IJ タ

タル N

コト

ŀ

信スルヲ以テ此處ニ詳説ヲ避クヘ

囘セ

シメタル

米「ソ」兩國ヲ日

條第三項

ノ下ニ設置セン

ŀ

-スル

「點ハ總

テ 臣

ハ

日

支問

題

開ス

N

限リ聯盟ト

1

協力

1

限界

Ξ

達

シ

, A

次米國 尙臣 國ヲ通過 疎隔ヲ來シ 万 ッ ヲ 經 シ テ其 タル 由 ユネー シタ ノ事實ニ顧ミ聯盟總會終了後歸國ノ ノ近狀ヲ N ヴ」退去後歐洲 カ滿洲事變勃發以來日米ノ關係 看日 米關係 ノ數國ヲ巡歴シ歸朝 2 改善ニ 努 4 ル 、際ハ Ц ハ 時 1 1 同 或 _ 涂

21

認 ム ト最後 ヴ」ノ會議ヲ通シテ歐米一 タル 支那ニ對シテハ寧ロ 投票ヲ爲シタルモ決シテ帝國ニ對シ敵意ヲ有シタル レル環境ニ胚胎スル衝突ナリ要之四十二國ハ日本 用ヲ認メサルニ在リ大國ハ勿論小國ノ間ニ於テモ臣等力說 險惡ナル歐洲ノ事態ニ直面シ聯盟ヲ以テ生命線ト看做 ハ ハ 1 ν レルカ其ノ宗旨トスル所 大體理解シ來レリ然ルニ敍上歐洲ノ特殊事情ニ照スト 如 小國ハ兵力使用ニ關スル限リ日 結果極東ノ特殊事情及日本ノ行動ノ已ムヲ得サリ サ モノニ他 キ諸種ノ ルヲ得サル立場ニ在ルモノニシテ換言スレ N コ ニ附言ノ要アリト ŀ 勿論ナリ又歐洲 理由ヨリ已ムヲ得ス我方ニ反對ノ ナラス唯支那ノ混亂狀態ニ付テハ 嫌惡ノ念ヲサヘ懷キタルニ拘ヲス敍上 信 い如何ナル場合ヲ問ハス兵力 般ニ著シク之ヲ了 小國ハ前述ノ ス 本ノ / 主張ヲ假 如 キ不安定ニシ 解 い二箇 ッ 令間接ニモ 2 行動ニ出 千二反對ノ 來 ニ非ス л シ ν ノ異 ネ コ 2 ル 1 ٢ 使 居 テ 1 テ キ コ

鱗 ラ 次ニ テ シ 務局内ニハ 7 ハ ニ過キサル ハ ラ カ其ノ後各地ニ於テ得タル IJ 絶對ニ 滿洲 ジ ント = ス ユ 他 關 シ N ネ 支那ヲ憲兵制度ノ下ニ置キ聯盟自ラ之カ監督 モノ Ī ノ考案アリタルコト事實ナル i 、干渉ヲ リ ヴ 1 -謂フヘ ット 滯在中 許サ ン」報告書ニ現レ ク斯ノ如キ考案カ滿蒙問 ス ハ 、確實ナル ト 情報ヲ綜合シテ顧 爲ス帝國 Э ト 1 タ 根 力 ヲ (本方針 ル 如 知 い所ハ其ノ片 N N パラ得サリ 題 ŀ るこけ 相 Ξ 容

佛國 所 ヘラレ 盟ニ於テ對日强硬策ヲ執ルヘキコトヲ慫慂シタ キ 對 サ 説報告シ其ノ報告カ英國ノ態度硬化ノ原因ノート N リ 結果ハ盧報ナリシコトヲ確メ得タル ハ想察ニ難カラス當時米國政府ハ英佛等ノ政府ニ對 |米方針及對歐洲政策ニ影響ヲ及ホスノ虞アリト見タ ル 1 歐洲ノ現狀ニ直面 ノンゼ 主義原則ヲ支持セサル 所ニシテ而 1 臣 態度ニ其 イ」カ米國ニ於ケル對日感情ノ險惡ナル ハ其ノ後右報道ノ眞偽ニ付特ニ探査ス ノ反 モ英國カ帝國ノ主張ヲ容認スル |映ヲ見 シテ 同國カ聯盟及聯盟ノ ヘカラサルト爲ス N 二至 ーリシモ カ當時駐米英國大使 1 卜 據テ以テ 考 ハ ハ又已ムヲ得 ル所 ニ於テ リト \sim ラ ナリ コト アリ 1 N · 延 テ 力 リ 説 聯 ル ふ 立 N 餰 へ 右 ッ

長其ノ他ニ於テモ之ニ大體同感ノ意ヲ表シ來レ 蒙政策ノ遂行上 シ二月中旬迄ハ聯盟事務總長、 ニ於テ之ヲ論議スル機關ノ設置ハ巳ムヲ得サルヘシト覺悟 義ヲ疑フ嫌アルヲ遺憾トシ如何ナル ルコトヲ以テ念トセリ而シテ場合ニ依リテハ聯盟内ニ何等初ヨリ何等ノ術策ヲ弄セス臣等ニ遣サレタル一途ヲ前進ス長言ト誤認セラルルカ如キ一切ノ言動ヲ愼マント決意シ最我ヲ凝フ嫌アルヲ遺憾トシ如何ナル場合ニ於テモ虛僞又ハ←了解シタリ又臣ハ最近動モスレハ國際間ニ於テ帝國ノ信 ノ形ニ於テ滿洲國ノ成長發展ヲ看視シ又ハ「ジュネーヴ」 シテ臣ノ同僚二代表、 モ聯盟臨時總會ニ 留リ以テ日支紛爭ノ實際的解決ヲ企圖ス 或程度迄我ニ不利 ヲ宣シテ退席ス ナカラ敍上ノ信念覺悟 シテハ更ニ進ンテ斯 ニ實質的障害ヲ生セサ 臨 4 N 代表部員、 ニ當リ ニ至リタ ナル聯盟ノ言動ヲモ隱忍シテ聯盟 英國外相、 É ノ如キ實質的 ノ貫徹ニ最善ノ努力ヲ爲 N ハ 新聞記者等全部一 帝國政府 ハ 、ル限リ 寔ニ恐懼ニ堪へ 聯盟臨時總會議 ルニ在 い意響 或程度迄讓 ノ目的 IJ N ハ 團 Ξ 我滿 モ サ IJ Ĵ ŀ 步 ル ランコ シタル 反 ル 於テ有スル權益ニ不安ヲ抱カシメタルコトモ與テ力アリ Ξ 以テ脅シタ モン」外相、 變更ノ理由ハ 係ナキ限リ大體英國ノ爲ス所ニ從フ實情ナルカ英國ノ態度 變更シタルニ存ス元來聯盟内ニ於テ佛國ハ重大ナル 聯盟ニ留 聯盟ニ留リ得サル 點ハ稍完全ニ庶幾キ結果ヲ得タルモノト云ヒ得 ヲ ルモノハ英國次テ之ニ追隨シテ佛國カ一月中旬ヨリ ルヲ発レサルモ我滿蒙政策ノ遂行ニ障害ヲ生セシ ス 七 ナル シテ更ニ一月初以降熱河問題ノ進展カ同國ノ京津地 素ヨリ 印 サ ス 7 帝國 \mathbb{P} ル ヘシ右等直接原因ノ外ニ英國ハ其ノ重大ナル N 限リ極度ノ讓歩ヲ敢テス ヨルノー事 ヲ以テ巴里媾和會議以來一貫セ 他ノ點ノ實現ニ付テモ臣等ノ微力極メテ コ ルコト第二ニ米國招請ノ失敗ニ失望シタ ŀ ノ立場ヲ正解セル演説ニ對シ支那カ英貨排斥 「カナダ」、「オーストラリヤ」代表等カ為 第一ニ十二月初旬ノ ヲ念願 ニ至リシ原因ハ種々アルヘキモ ハ完全ニ失敗ニ歸シタ ト シタ ルニ今ニシテ顧 N 總會一般討議ノ際 モ 米國ノ感情ヲ損 ル N 大方針ト為 コ ル

ルコ 初ヨ 食言ト

力

モ Ŷ

之ヲ タ IJ

機會 カ 臣 微力

シ

・ テ 日

本精神ヲ世界ニ徹底セシム

N

爲ノ

_ 步

IJ

叉

方大戰勃發直前ニ比シテ更ニ甚タシキ不安狀態ニ在

利益

2 七

居

サ Ξ タ ĩ

Ż

七方ニ コト

N テ

1

而

内ニ

シ

叉

ハ

ŀ

了解シタリ

抑 所

ル

Э

٢

テリ

ト遺憾ニ堪へ

,不充分ナ

サ

Ň

1

 \sim

其 シ ×

利害關

__

サイ

態度ヲ ノ最タ Ξ

右ノ諸點

中

20

外交政策一般

三、然ルニ「ヅ メー ル」大統領 バ 五月六日不慮ノ兇手ニ 斃 23

意見ハ重キヲ爲スコトト考ヘタ爲メテ在リマス 更ニ一歩ヲ進メルコトガ出來タナラ、單ニ極東平和ノ爲 兩洋相互ノ間ニ諒解ヲ進ムル事業ニ關シ、自分ノ經驗ノ 御信任狀捧呈ノ際ノ演述中ニモ夫レトナク日佛提携ノ要 ヲ盡スコトカ、其使命テアルト考へ、 ヲシテ居タ人テスカラ、 シ メノミナラス、世界人道ノ至幸ト考ヘルト述ヘテ置 カノ如キ感カアル、幸ニ之ヲ機トシテ日佛兩國ノ提携ニ ハ、佛國ニ於ケル長岡ノ任務ノ幸先ヲ天カ祝福シテ居ル ノ懸案テアツタ關稅取極力、將ニ結ハレントシテ居ル 談ノ際、長岡ハ大統領ニ、日本ト印度支那トノ間ニ長年 會ヲ得シヲ悅フ」ト云フ一句カ在リマシタノテ、 數年間ニ於テ、自分ハ之レカ各般ノ本義ヲ發見スルノ機 ヲ有セヌノハ申ス迄モ在リマセンカ、其答辭中ニ「東西 ヲ述ヘマシタ、大統領カ立チ入ツテ之ニ應答スルノ自由 ル長岡ト致シマシテハ、何ヲ措テモ日佛接近ノ爲ニ最善 ト モ親善ヲ加エ得ル餘地カ在リマスカラ、佛國ニ赴任 タ、是レハ「ヅーメール」大統領ハ 極東ノ事態ニモ通シ、 嘗テ印度支那總督 四月七日大統領ニ 從ツテ其 式後雜 + 7 1 ス

二、長岡ハ昨年ノ二月二十四日ニ東京ヲ出發シ、滿洲ヲ見學 ノ上、 得ル國ハ極東ニ相當ノ權威ヲ有スル列强中テ佛國ヲ措テ カラ、 行動ヲ非議シ、 當時ハ上海事件ノ眞最中テ、 マシテ本日ハ之ヲ主題トシテ奏上スルノヲ差控ヘマス、 其他ヨリ詳細奏上濟ノコトテ在リマスカラ、 ケ 政ニハ由來萬腔ノ信賴ヲ置キ難イ憾ミカアリマス 他ニ之ヲ求メルコトカ出來ヌ様ニ考察セラレ、此見解ニ ニ遭遇シタ苦キ經驗ノミヲ追懷シテ居ル様ナ有様デシタ ト カ利益テアリ、 シ英米トノ妥協カ容易テ無イナラハ、佛國ト握手スルノ ハ本邦ニ於テ多數ノ共鳴者カ在リマシタ、 ル代リニ、 「スチムソン、 環境ハ誠ニ寒心スヘキモノテ在リマシタ、 シテヽ在リマスカ、聯盟關係ノ諸事項ハ旣ニ松岡全權 ル帝國理事トシテ又臨時總會ニ於ケル帝國全權ノ一員 斯ノ如キ半孤立狀態ヨリ帝國ヲ救出スル爲握手シ 露獨等ヲ經テ三月十八日巴里ニ到着致シマシタ、 北京ノ關税會議以來殊ニ漢ロ、 英國ハ華府會議ノ際其採ツタ態度ヲ顧ミ ドクトリン」ヲ旗幟トシテ、正面ヨリ我 又此提携ヲ基礎トシ佛國ヲ介シテ英國等 外交的見地ヨリスル我帝國 尤モ佛國ノ外 南京事件 重複ヲ厭ヒ 米國ハ夫ノ カ ノ時 若

> 一年半ノ間ニ取扱ヒマシタ主タル事柄ハ、 駐佛一 年半間ノ佛國情勢奏上 昭和八年十月十二日 國際聯盟ニ於 マシ 奏上 タ

一、大命ヲ奉シマシテ長岡カ今囘佛國ニ駐劄シテ居リ

松岡 洋右 右謹ミテ闕下ニ復命ス 第ナル處現政府ニ於テハ少クトモ當分ハ斯ル言動ヲ愼ミ對 遂ニ我國民ノ感情ヲ剌戟スルカ如キ言動ヲ見ルニ至レル次 侵略者ナリト誤認スルニ至リ元來カ愼ナキ國民性ヨリシテ 發生ニ際シ平和論者、 豫テ一種疑惧ノ念ヲ以テ之ヲ看ル者アリタルニ偶滿洲事變 存在セス單ニ帝國カ異常ニ迅速ナル發展ヲ遂ケタルニ對シ 確信ヲ得 日 那側ノ執拗ナル宣傳トニ惑ハサルル者少カラス帝國ヲ以テ 的ヲ達シ得タリト信スルカ就中米國ニハ日本ニ對スル敵意 四月中旬ニ亘リ三週間同國各地ヲ巡歴ノ結果多少敍上ノ目 考ヘタル所ナルヲ以テ外務大臣ノ承認ヲ得テ三月下旬ヨリ ヲ去ルノ已ムナキ場合ニハ一層然ルヘキコト豫テ臣ノ私ニ ハ 關係ニ付テハ消極政策ヲ執ラント決心セルモノナリト 聯盟ニ對スル任務ヨリモ更ニ重大ナルヘク殊ニ萬一聯盟 タリ 聯盟論者等ノ平和一點張ノ論議ト支 Ż

昭和8年10 月 5 日 広田(弘毅)外務大臣宛湯浅宮内大臣より

3

在仏国長岡大使帰朝に際し参内上奏について

記 十月十二日上奏

付

宮發第四六三號 「駐佛一年半間ノ佛國情勢奏上」 (10月6日接受)

昭和八年十月五日

宮内大臣 湯浅 倉平 Ð

外務大臣 廣田 弘毅殿

特命全権大使 長岡

佛國ヨリ歸朝 榮介 春

右今般頭書ノ通歸朝又ハ出發ニ付來十二日 ルーマニア國へ出 發 特命全権公使 拜謁被仰付候條 藤田

午前十時十分參內候様御達相成度候

쥣 記

昭和八年四月二十

八日

國際聯盟總會臨時會議帝國代表

リマ 調印スルノ光榮ニ浴シ得マシタノハ誠ニ望外ノ幸セテ在 居マシタガ、二十五年間モ其運ヒニ成ラナカツタ ヲ ダ 長岡カラ去ル三月ニ着任挨拶ノ爲御訪問シタ時、 度イト思ハサルヲ得マセン、況ンヤ前述ノ如ク東京出發 來得ヘクハ此機會ニ日佛協約ニ依ル提携ヲ更ニ一步進メ ラ交渉ガ急ニ進捗シ、長岡カ巴里ニ着クト間モ無ク之ニ シテ堪ヘラレマセンデシタノニ、昭和六年ノ十二月頃カ カラ、當時ノ記憶ヲ喚ヒ起ス每ニ、如何ニモ齒痒サヲ感 事態全ク混亂シ、加フルニ共產黨ノ運動力益々甚タシキ ヲ更ニ一層増進サ 成立ヲ希望シテ居タモノデ、之カ締結ハ日佛ノ親善關係 一段落ヲ告ケタ、此關税條約ハ日本ノ朝野カ長年ノ 題カ片付イタラ、引續イテ政治問題ニモ談及シタイモノ 首相兼外相ト二人ギリテ、 前カラ此腹案ヲ持ツテ居マシタカラ、 テ日佛協約ハ玆ニ初メテ完成シタノテアリマスカラ、 加へ、 トノ御話ガ在ツタガ、只今調印シタ條約テ經濟問題ハ ス。斯ノ如ク長岡ノ考テハ日印支關税條約カ成立シ 日佛ノ亞細亞大陸領モ不安ヲ感スル次第テアル セルコトヲ疑ハヌ、 差シ向ヒノ懇談ヲ試ミマシタ。 近來極東ハ 條約調印後「タ」 支那 經濟問 1 間其 テス 出 1

六第二囘目ハ五月十三日 タ後ノ會談テアリマスカ、 タ際、日佛協約カ結ハレ、當時我々ハ此協約ノ引續キト 六月ニ海牙ノ第二囘平和會議ニ參ル爲巴里ヲ通過シ シテ間モ無ク日印支條約カ當然締結サレルモ リマシテハ殊ニ深イ意義カ在リマス、夫レハ明治四十 ニ日印支關稅條約ノ調印ヲ濟 此關稅條約ノ成立ハ長岡ニ取 1 ト考ヘテ マ マ シ 车 シ

25

前述ノ要領ヲ告ケテ、「タ」氏カラ何カ話ハナカツタカ 打過キマシタ。 ラ歸巴後何ノ音沙汰モ無イノテ甚タ失望シツツ、其儘ニ ミニシテ居マシタガ、四月三日英國ニ赴イタ「タ」氏カ ケテ本話題ニ深入スル コ ニ少シモ氣乗リカ無イノデ打切ツタノカ、無論推斷スル タ爲「タ」氏カ失念シタノカ、或ハ又切リ出シタカ先方 ニ付テハ何モ記憶セヌト答ヘマシタ、餘リ用談カ多カツ ト ト尋ネマシタラ、「サ」外相ハ臨時總會ニ對シテ執ラン トハ出來マセンカ、「サ」外相カ記憶セヌト答ヘタ タ」氏カ倫敦テ之ヲ切リ出シタトシテモ無駄ニ終ツタ スル日本ノ態度ノコトニ付テハ話カ出タガ、上海問題 ハ 明瞭タト考ヘマス 其後壽府テ「サイモン」外相ト會談ノ際、 ノヲ好マヌ態度カラ見テ、 假令 丈

> 行ツタラ當ツテ見ヨウ、ソシテ其模様ハ歸巴後御話シヨ 程度迄英國カ煮エ切ツタコトヲ云フカ分ラヌガ、 氏ハ至極同感テアル、一体事ノ起リハ英國カ惡イノデ、 様、御盡力カ願ヒタイト述ヘマシタラ、「タルヂュー」 若シ幸ニ同見テアルナラハ、倫敦テ此方向ニ話ヲ進メル 聯繫カ取レル様ニテモナレハ、非常ナ幸セタト思ヒ、 ノ鼻息許リ窺ツテ居ルカラ、 於ケル立場ヲ甚タ惡シクシタノデアル、英國ハ目下米國 同國カ日英同盟ヲ廢棄シタコトカ英國殊ニ日本ノ支那ニ 故、此際再ヒ以前ノ様ニ結束ヲ堅メル必要ガ在ルト思フ、 英國ノ漢口、九江租界事件等ヲ頗ル遺憾トシテ居ルモノ ト考ヘル、自分ハ關稅會議以來列强ノ結束カ亂レ、 同シテ支那ヲ壓迫スルコトガ、極東平和ノ爲最モ必要タ 事態ヲ紛糾サセル許リタカラ、此様ナ場合ニハ列强カ協 ト、騒カスニ濟ム事柄ヲ又蒸シ返スコトニ成リ、 定案カ出來上ツタ場合、對内事情ノ爲ニ支那カ調印ヲ拒 アリ又妥協ニ骨ヲ折ツタ列强ノ代表者モ妥當ト 約束シマシタ。長岡ハ若シ之ヲ切ツ掛ケニ日英佛 上海事件カ再ヒ聯盟ニ持チ出サレル様ナコトニ成ル 今ノ御話ニ付テモ如何ナル 認メル協 倫敦ニ 徒ラニ 殊ニ 1

テ居ラレルノハ誠ニ幸セナ次第テアリマス 學校ノ出身テ、本邦ニ於テ日佛親善ノ爲ニ努力サレテ居 悼以外ニ、日本ノ友人トシテノ氏ノ訃音ヲ頗ル慨歎シマ シタガ、後任大統領「ルブラン」氏ハ「ポリテクニック」 ル曾我子爵ト同窓ノ關係ニ在ラレ、我國ヲ能ク理解サ レラレマシタ、之ニ直面シタ長岡ハ佛國元首ニ對スル哀 v

リマスガ、此時長岡ハ上海ノ交渉ハ漸次進捗シテ居ル模式其第一囘ハ聯盟關係ノ用談テ四月一日ニ面會シタノテ在 四佛國テハ五月一日ニ下院議員ノ總選擧カ行ハレ、 二囘ニ過キナカツタノハ誠ニ殘念テ在リマス 長岡カ首相トシテノ氏ト政治的意見ヲ交換シタノハ僅カ 事情テ長岡ノ着佛後間モ無ク現職ヲ去ル様ニ成ツタ爲、 氏モ亦日本ニハ非常ニ好感ヲ持ツテ居マスカ、右ノ如キ 氏ノ直系テ、 キヌ事ト成リマシタ、・「タルヂュー」氏ハ「クレマンソー」 ヂュー」内閣ハ新議會カ成立スル迄ノ事務内閣タルニ過 社會黨トノ左黨合同カ大勝利ヲ得マシタノテ、 「ク」氏カ親日的テ在ツタト同シク「タ」 急進黨 「タル

様テハ在ルカ、最後ノ瞬間ニ責任ヲ執ツテ調印スル支那

人カ居ルカ否カ甚タ疑ハシイ、

幸ニ日支兩國ニモ滿足テ

27

九、然シナカラ何トカシテ佛國ヲ今迄ヨリモヨリ多ク日本ニ 契約カ結ハレマシタガ、該財團カ未タ活動ヲ開始シ得ヌ 引付ケル工風ハ無イモノテアルカ、是レニハ二ツノ考案(**) 1 國ヲ日本ニ引キ付ケルコトテ在リマス、此意味テ昨年秋 國ヲシテ滿洲國ノ休戚ニ利害ヲ感シサセ、之ニ依ツテ佛 ノ手段トシテ佛國ノ資本ヲ滿洲ニ入レサセ、或程度迄佛 マスガ、之カ實現ニハ相當ノ困難カ在リマスカラ、 解決スルコトニ依ツテ、兩國ノ提携ヲ進メルコトテアリ 南革命黨ノ取締ト交換的ニ上海佛租界ノ不逞鮮人問題ヲ カ在リマス、其一ハ佛國カ長年來氣ニ病ンテ居ル在日安 「ド」ノ代表スル財團ト滿鐵トノ間ニ本年二月末ニ組合 「ドリル」ヲ主班トスル ハ誠ニ遺憾テアリマス 企業團ノ滿洲視察ヲ推奬 シ、 第二

性モ亦從ツテ消散スルニ至リマシタ。外交ハ益々影力薄ク成リマシタカラ、我々ノ腹案ノ實現感得致シマシタ、殊ニ左黨政府ノ成立以來、佛國ノ自主如何ナル內閣テモ到底爲シ得ヌト云フコトヲ、ツクヅク外視シテ、話ヲ進メル様ナコトハ、利害ノ打算上佛國ノ

八帝國政府ハ八月下旬時局ノ處理方針ヲ定メ、長岡モ詳細 直接利害ノ懸ル所テ在リマスカラ、利害關係ノ薄イ支那 對米戰債問題ト、軍縮問題是レモ他ノ云ヒ表ハシ方ヲ 動キヲ現實ニ觀察致シマシテ、極東問題ニ關シテ佛國ニ 努力ヲ盡シタ積リテハ在リマスカ、巴里ニ參ツテ佛國ノ 此考テ日本ヲ立チ、巴里ニ着キマシタ以來其爲ニ最善ノ 害關係ヲ有スル大國ノ中デ佛國ト先ツ話シ合ヒヲ進メン 問題テ日本カ誘ヒヲ掛ケテモ、 殖民地ノ安全ハ現在殆ント脅カサレテハ居ラヌ、佛國ト Ξ 力 ハ ニ亘ル訓令ヲ接受致シマシタカ、政府ノ意嚮ハ極東ニ利 悟テアルト答ヘマシタ シテ最モ重要ナ現下ノ國際案件ハ賠償問題言ヒ換ヘレ ト欲スルニ在リマシタ、前ニ申述ヘマシタ通リ、長岡モ 對シテハ無論大關心カ在ルニハ相違アリマセンカ、此極東ニ有スル利害ハ極メテ徴々タルモノテ、印度支那 、極東ニ有スル利害ハ極メテ徴々タルモノテ、 自主外交カ無イト云フコトヲ發見シマシタ、 ハ國防問題トテ在リマシテ、 、佛國ニ取リ緊切重要ナルヘレモ他ノ云ヒ表ハシ方ヲス(件ハ賠償問題言ヒ換ヘレハ 大切ナ英、 米ノ向背ヲ度 畢竟佛國

告テアレト答へす/** 合ニハ忌憚ナク相談ヲ受ケタイ、自分ハ眞摯援助スル覺ハ無イカ、將來滿蒙問題ニ關シ日本カ難局ニ遭遇シタ場

過敏故、 シタラ、 ルモノテアルト答ヘマシタ、「タ」首相ハ日佛兩國丈ケ島嶼ニ關スルコト故、之ヲ亞細亞大陸領ニ及ホサントスニ講究スルコトトシテハ如何ト思フガ、華府四國條約ハ互ニ情報ヲ交換シ、必要アラハ之ニ善處スヘキ手段ヲ互 親日政策ハ自分ノ本領テ在ルカラ、此考案ハ主義ト 國ハ亞細亞大陸領ニ沒交渉タカラ如何カト思フト述ヘマ參加ヲ希望スルナラ、日本ニ異存アリトモ思ハヌガ、米 テ之ヲ結フ意思カト聞キマシタカラ、長岡ハ若シ英國カ Ξ テハアルカ、之ニ對スル貴見如何ト 政府ノ意嚮ヲ尋ネタモノテハ無ク、全然自分一個ノ私見 アルカト反問致シマシタカラ、長岡ハ大体華府四國條約 ス 力 ル次第テアルガ、其様式ハ漠然タルモノトスルノ趣旨テ 「タ」首相ハ佛國トシテモ右ニ付テハ大ナル關心ヲ有ス - よ と、 則リ、兩國ノ利益ヲ害スル虞レアル事態ニ關シテ、相 ル措置ヲ講スルノガ必要且有益テアルト思フ、以上ハ ラ、此際 米國ヲ除外スルノハ其感情ヲ甚タ害スルダロ 次テ自分ハ日本トノ握手ヲ長年來考ヘテ居 「タ」首相ハ米國ハ近來支那問題ニ付頗ル 一九〇七年ノ協約ニー歩ヲ進メテ事態ニ適應 試問致シマシタラ、 神經 シテ ル ウ

七斯ノ如クシテ「エリオ」内閣ハ六月四日ニ成立シ、「エ」 スカラ、 居ルガ、此問題ニハ實際的ノ方面ト共ニ、法律上ノ方面 氏ハ外相ヲモ兼攝シマシタ、長岡ハ祝辭ヲ述ヘ旁十一日 閣ハ更迭シマシタガ、是レハ寧ロ當然ノ成行テアリマス。 首 見ヲ反影スルモノテアリマスカラ、 兩國ノ親善增進ノ爲ニ盡シタコトハ周知ノ事實テアリマ 返事シヨウト答ヘマシタ。無論其後何ノ反響モ無ク、 處理ノ爲ニノミ留マツテ居ル狀態故、斯ノ如キ問題ニ深 ニ取リ死活ノ案件テアルコトヲ力説シマシタラ、 テ置クコトカ肝要タト考へ、滿蒙問題ノ起源カラ帝國軍 モアル様タト云ヒマシタ、 シタ所、氏ハ本問題ニ對スル日本ノ立場ハ能ク了解シテ ニ同氏ヲ外務省ニ訪問シマシタ、 体ト併セテ閣僚ト篤ト意見ノ交換ヲ爲シ、何レ其上テ御 入スル權能アリヤ否ヤモ一考セネハナラズ、問題夫レ自 自分ノ考ト一致スルモノテアルガ、 柏ハ本問題ニ付テハ未タ閣僚ト意見ノ交換ヲシタ 行動ノ正當ナコトヲ縷述致シマシタ後、本問題カ日本 之ニ對スル謝意ヲ述ヘタ後滿洲問題ニ言及シマ 後段ハ氏ノ率ユル急進黨ノ意 「エ」氏ガ是レ迄日佛 此際其謬見ヲ指摘シ 現内閣ハ最早事務 Γн] コト 内 Ï

ハ 獨、伊ノ三國テ、 機構内テ取扱フコトト成リ、從ツテ之ニ利害ヲ有スル 殘骸ヲ留ムルニ過キヌ無意義ノ文書ノ様ニ申シテ居リマ 議テ非常ニ修正サレマシタカラ、或者ハ之ヲ目シテ單ニ 春公然提示サレルニ至リマシタ、 リマスガ) ニ投セヌ方針ヲ採ルコトト思ハ 洲大陸ニ重要案件カ勃發シタ時、英國ハ成ルヘク其渦中 ス、ソシテ現下ノ國際配合カラ考察シマスレ ニ至ツテハ、少シモ原案ノ趣旨ニ變更カ無イノテ在リマ ハ伊、佛、英、獨ノ四大國カ先ツ協議スルト云フ大原則 ノ意嚮ヲ求メルコトニ成リマシタガ、歐洲一般ノ諸問題 ト申シマス所以ハ、 スカ、是レハ大ナル觀測違ヒテハ無イカト思ハレマス、 信頼スルニ足ル佛國ノ新聞記者ノ信シテ疑ハヌ所テア ` 「ヒツトラー」ニ勝利ヲ得サセ ソシテ傳ヘラルル所ニ依レ 條約改訂ノ問題ニ付テハ成程聯盟ノ ν 協約原案ハ佛國側ノ提 マス故、残ルノハ佛、 ハ、 ル爲ニ、 成 何カ歐 (是 レ シテ此 國々

致シマシタ 得ル爲メ小協商ノ常設事務局ヲ壽府ニ設クル イテ「ベルグラード」ニ會合シ、 急迫セル事態ニ對應 コトヲ決議 シ

三不幸ト申マスレハ去年ノ十一月羅馬テ開カレタ學會ニ出 カ多分ニ生シタ爲彼等ノ態度カ更ニ頑强ヲ加ニ至ツタノ タ是等小協商諸國ニ取ツテ、此報道ハ實ニ晴天ノ霹靂テ、 べ、 對シテ中央欧羅巴諸國ノ國境改訂ノ必要ヲ力説シタトノ 氏カ同地ニ參リマシタ節、「ムツソリニー」首相ハ 席ノ爲佛國上院、外交委員長「アンリー、ベランジェー」 如何ニ依ツテハ自國ノ運命ニモ大ナル影響ヲ及ホス虞レ 最早人事テハ無クナツタノテ在リマス、 小協商國側ニ轉報サレタノハ十二月初旬ノコトテ在リマ 商國ノ外務大臣ハ十二月ノ聯盟臨時總會ガ終ルト、 ハ、帝國ノ爲誠ニ遺憾ノ次第デアリマシタガ、是等小協 コトテ、氏カ巴里ニ歸ツテ政府ニ此報告ヲ爲シ、是レカ 今迄日支事件ヲ何レカト云ヘハ純理的ニ考察シテ居 日支事件ノ解決 氏二 引續

會黨系ニ屬スル「ポール、ボンクール」氏カ内閣ヲ組織 努力シタ模様テ在リマスカ、日支問題カ聯盟テ最後ノ幕 借スニ時ヲ以テセサル タ ニ近ツキツツアル時、去年ノ十二月中旬ニ辭職シテ、 スルニ至ツタノ ハ、本邦ニ取リ不幸ナ出來事テ在リマ 可ラスト云フ方針テ、之カ爲相當 社 シ

シタ、 所以ヲ述ヘテ説得ニ努メマシタカ、急進黨ヤ社會黨ノ人々 在ルコトハ云フ迄モ無イ、只個人タル資格ヲ離レ、政府 時ニ日本カ極東ニ於テ文化ノ維持者タルコトモ能ク了解 カ如何ニモ悲觀スヘキ狀態ニ在ルコトヲ切實ニ感シ、 カ如何ニモ悲觀スヘキ狀態ニ在ルコトヲ切實ニ感シ、同官「エール」提督カラ極東ノ事情ヲ詳細聽取シテ、支那 シ 十二日ト二十日ニ「エリオ」首相ヲ訪問シテ懇談致シマ國當局ヲ啓發誘道スル必要カ在リマスカラ、長岡ハ九月 ŀ 申シマス 事態ニ置カレテ居ル爲全ク手ノ付ケヨウガ在リマセ ノ ハ黨議モアルコトナリ、黨人トシテハ其主張ヲ變へ得ヌ コトヲ繰返シマシタカラ、長岡ハ懇切鄭寧ニ其謬見ナル ハ又法律的半面カアル云々トテ、此前會談ノ時ト同様ノ ノ當局者トシテ意見ヲ述フレハ、滿洲問題ニ關シテ事實 「エ」首相ハ更ニ語ヲ次キ、 方面ヨリスル見地ハ自分モ能ク了解スルカ、本問題ニ タカ、此時「エ」首相ハ先頃歸佛シタ前極東艦隊司令 成功率ハ殆ント皆無ナノテハ在リマスカ、夫レハ夫レ シテ、出來ル丈聯盟ニ於ケル我立場ヲ改善スル爲、佛 自分ハ今迄日本ノ友人テアツタカ、今後モ同様テ , 乃至日佛ノ提携ニ一歩ヲ進メントスル考案 御話ノ趣旨ハ能ク了 ,解シタ ヾ

> ||、以上「エリオ」首相トノ會談ハ昨秋ノ聯盟總會カ開カレ 期 カラ、 此意味テ行動スル考ヘテアルト告ケマシタ 出 滿洲問題ノ解決ヲ計ルコトニ努力シ、 出來ル丈ノ努力ヲ爲シ、之ヲ緩和スルニ盡力シ、日本ノ ク、ル、パクト。ツー、ル、パクト。)ヲ聲明シ、之レ ル直前巴里テシタモノテアリマスカ、同首相ハ該總會テ 米國ノ「リード」ヤ支那ノ要人ニモ話シタカ、 支持セントスルノニ在ルガ、之カ爲ニハ事件ヲ焦セラス、 「完全ナル聯盟規約ノ尊重遵守」(ル、パクト。リヤン、 來ル限リ愼重ニ事ヲ運フノカ肝要テアルト信シ、 待ニ添フヘシト述へ、自分ノ意思ハ實際的ノ見地カラ 壽府テ日本カ難局ニ立ツ様ナ事ノ在ツタ場合ニハ、 之ニヨリテ日本ヲ 壽府テモ 旣ニ

> > 28

觀カ在リマス、「エ」首相カ此聲明ヲ爲スニ至ツタ動機 ニモ腐心シ、 膽カラト云ハレテ居マスカ、他方彼ハ我國トノ親善維持 懸命ニ成ツテ居ル安全保障問題ヲ有利ニ解決セ ン」ヲ取リ入レ、米國ヲ捲キ込ンテ、 ハ、當時米國側テ高調シテ居タ「スチムソン、ドクトリ ハ今日ニ至ル迄急進黨内閣ノ「モツトー」ヲ爲シテ居ル 前述會談中ニ言及シタ滿洲問題ノ解決ニハ 佛國カ軍縮會議テ レントノ魂

居ラレマシタカラ、其舊友トシテ來タ人モアリマスシ ヲ 寄 モナク、 歸國前 對シ、 出テヌノテアリマスカ、蜂須賀侯ノ時ハ百名近クノ 又駐佛大使ノ立會ニ表敬ノ意味モアリマシヨウカ、 力 ア マ 極東旅行ヲ終ヘテ巴里ニ歸リマシタ「ピエール、 是レハ見様ニ依ツテハ些事テ在リマスカ、 ナル過誤ト認メテ居ルモノノ様タト ヲ致シマシタカ、其印象ナリトテ語 テ ロヲ極メテ聯盟ノ有害無益ナコトヲ高調シマシタ、 在 IJ マ シ ノ依賴ヲ受ケマシタカラ、壽府ヲ引揚テ歸リ 各員均シク佛國カ從來ノ對日態度ヲ變更シタコト イ」氏カ三月十五日上院外交委員會テ極東事局ノ IJ, シテ、 *A* セ マ 「マシタ、 ス、普通ノ場合此種投票ニ來ル會員ハ四五十名ヲ 當時進行中ノ熱河問題ヲ「モロッコ」討伐ニ比シ、 「ユニオン」俱樂部ニ入會シタイ故取運ンテ吳レ 長岡カ推薦者ノ一人トシテ入會投票ヲシテ貰ヒ 此俱樂部ニハ駐佛大公使ノ大部分カ入會シテ居 各員悉ク立會人タル長岡ニ對シ本邦祝福ノ 巴里ノ俱樂部中テ最モ品ノ良イモノノ一ツテ 蜂須賀侯爵ノ先々代ハ佛國ニ公使ヲシテ ノコトテ在リマス。 ル所ニ依レ 蜂須賀侯爵カ · ハ マ 、シテ間 IJ 恰モ 言辭 投票 -ヲ 大 列席 斯 講話 ź 1

我決斷 已 ム 院外交委員長ノ スノハ申迄モ在リマセンカ、 7 際 論左黨ニ屬スル人々カ政府ノ執ツタ態度ヲ支持スル 府 テ申述ヘマスレハ、聯盟ヲ引揚テ巴里ニ歸リマ スルノ外ハ無イノテ在リマス。長岡ノ任地タル佛國ニ付テ居ルカト云フコトハ、是等ノ國ニ居テ親シク之ヲ研究 Ξ 度進退ヲ決スルコトカ尠ナクアリマセンカラ、日支事件 考察カラノミテナク、更ニ複雑ナ利害ノ見地カラ、其熊 如何ナル程度迄輿論ノ支援ヲ得テ居ルカト云フコ 行動シテ居ルニハ相違アリマセンカ、此等政府ノ ク別問題テ、政府トシテハ單ニ日支事件其モノニ對スル Þ 貤 ý トハ全ク異ツタ空氣テ、 關スル聯盟決議カ如何程ノ共鳴ヲ各國ノ輿論カラ受ケ ス ハ云ヘマセン、勿論其多數ハ本國政府ノ訓令ヲ受ケテ ニ代表者ヲ出シテ居ル各國ノ輿論ヲ代表シテ居 マセ ル時、 ヲ得ヌコトテアリマスカ、黨人タル資格ヲ離レテ ト ヽ · 自 信 的 其態度ニ全ク別人タル如キ觀アル 軍人力其陸軍タルト海軍タルト 「アンリー、 政策ニ對シテ滿腔ノ贊辭ヲ述 スカ、黨人タル資格ヲ離レテ交、非常ニ快感ヲ覺エマシタ、無「ヲ引揚テ巴里ニ歸リマスト、壽 曩ニ其名前ヲ申上マシタ上 ベランジェー」氏モ長岡ニ 処ヘテ吳レ -ヲ問ハ 者カ尠ナ 方策カ ト N べ、 六全 モ ク マ 1

カ此爲ニ根本的ニ破壞サレタト云フコトテ在リマス、更一今一ツ此四國協約ニ付テ申述ヘタイコトハ、聯盟ノ機構 會ニ加 協議ニ付テハ之ヲ圈外ニ置ク仕組テ在ツタノテアリマス、 事項ハ理事會テ大國カ之ヲ決シ、小國ハ總會テ自己滿足 テ構成セラレ、 議ニ提出サレタ聯盟規約ノ原案テハ、理事會ハ大國丈ケ ニ適切ニ云ヘハ此協約ニ依ツテ聯盟ノ機構カ其原形ニ立 國外交ノ失敗テハ無カツタノカト考ヘラレルノテアリ ツク」ニ對シテ孤立スル譯テ、 カ至當カト存シマス、果シテ然ラハ佛國ハ伊獨ノ「ブ 此原案ハ後ニ修正サレテ大國ノ外ニ小國ヲ四國丈ケ理事 ニハ差異カ無イノテ在リマスカラ、ツマリ國際間 チ歸ツタト云フコトテ在リマス。其意味ハ巴里ノ講和會 ノ爲ニ發言スルノ自由ヲ與ヘラレハシタカ、 「ムツソリニー」 トラ Þ 利問題テ獨伊 モ思ハレマセンカラ、「ムツソリニー」政權ト ー」政權トハ互ニ提携シテ行動スルモノト見ル ヘルコトニ成リマシタカ、 ソシテ理事會ノ權限ト總會ノ權限トノ間 ノ間ニ妥協點ヲ發見スルコトハ左程困 ハ多額ノ出捐ヲシタトノコトテ在リ、 ト考ヘラレルノテアリマス結局四國協約ノ成立ハ佛 矢張リ大國ハ多數ヲ維 重要案件ノ [ノ重要 \neg F 難 墺 1 カラ、 ハ ハ 漸次凋落シ、

ッ タ

30

共ニ加ハリ、獨逸ノ聯盟加入ニ附隨シテ理事會ニ於 盟カ出來テ見ルト、其本來ノ性質上小國ノ發言權 持シテ原案ノ精神ヲ貫イタノテ在リマス、 既ニ小國側氣勢ノ向上ヲ語ルモノテ、 想セラルルノテアリマス ナ陰險極マル手段ヲ執ルニ至リマシタノテ、聯盟ノ 場合ニハ、是等小國ノ代表者ヲ利用シテ其蔭ニ隱レル様 風潮ヲ馴致シ、殊ニ大國カ自ラ矢面テニ立ツノヲ欲セヌ ソシテ彼等ノ辯論ハ大衆ノ共鳴ヲ博スル傾キカアリマス リマセン爲、聯盟ヲ我物顔ニ振ル舞フカ如キ弊ニ陥 表者中ニハ聯盟創立以來常ニ出席シテ居ル者カ少ナクア 又大國ノ代表者ハ比較的頻繁ニ代ハリマスカ、小國ノ代 氣焰ヲ高メ、何事ニ依ラス辯論ヲ弄フ弊ヲ生シ ハ根本カラ破壞サレマシタカ、斯ノ如キ事ニ成 小國ノ代表數ヲ増加致シマシタ爲、 將來純技術事項ニ局限サレ 自國ニ利害ヲ感セヌ場合、大國モ之ニ聽從スル 四國協約ノ成立ニ依ツテ、 ルニ至ルノテハ無イカト 規約制定當時ノ 其後ハ年ト 聯盟ノ活動圈 然ルニ國際聯 マシタ。 ッタ -共ニ益々 い年ト リ、 權威 ノハ 精神 ケル 豫 1

壽府ニ於ケル空氣カ必スシモ

同

外交政策一般

33	度	@本月三日ヨリ總理外藏陸海五大臣五回ニ亘リ外交ト國防ト外
3	別電ト共ニ米ヨリ紐育へ信頼シ得ヘキ方法ニ依リ托送アリ	~ 記合第一九五一號(極秘)
	ハ佛ヲシテ信頼シ得ヘキ方法ニ依リ托送セシメラレ度	- 本 省 10月25日後9時0分発
	別電ト共ニ英ヨリ佛伊独露白ニ轉電アリ度又蘭及土耳古へ	海軍側修正案
	宛先、英、米、	四 日付不明、海軍省
	右貴官内密ノ御含迄	陸軍側修正案
	之ヲ行フコトトセリ	三 十一月三十日付、陸軍省
	尚右話合ニ基ク具体的方策ハ関係省間ニ於テ隨時協議ノ上	「十月二十日五相會議ニ於ケル陸軍側提示」
	ヲ申合セタル旨發表セリ	二 十月二十日、陸軍省提示
	ルコト	關シ所見」
	ナキヲ期スルト共ニ我國力ニ調和セシムルコトニ留意ス	「今後ノ國際情勢ニ對スル帝國外交ノ基調ニ
	ニ、國防ニ関シテハ他國ヨリノ脅威ヲ受ケス外侮ヲ蒙ルコト	付記一 十月十六日付、海軍省作成
	貫徹ヲ計ルコト	右申合わせ
	一、国際関係ハ世界平和ヲ念トシ外交手段ニ依リテ我方針ノ	大使、在米国出淵大使宛合第一九五二号
	右ニ関シ右閣議ニ於テ	別 電 十月二十五日発広田外務大臣より在英国松平
	ヲ報告セリ	わせについて
	引續キ本大臣ハロ頭ヲ以テ大要別電合第一九五二号ノ趣旨	五相会議で討議された外交方針に関する申合
	見ルニ至レルヲ以テ本月二十一日閣議ノ席上總理ノ報告ニ	
	ノ相關關係ヨリ諸重要問題ニ付話合ヲ為シ大体意見一致ヲ	
	-	次第故出來ル公算ノ無イ問題ヲ捉ヘテ徒ラノ関ヲ派リア論と、なシノリーイディー
	居リマス。	紙カ司協約ノ發棄意見ヲ書イタ如キハ其一例テ在リマス
	對ヲ受ケ、其成功率ハ殆ント皆無タト長岡ハ確信致シテ	ト云フテ、政府ヲ攻撃シマシタノニ對シ、左黨側ノ新聞
	ル様ナコトカアツテモ、此政策ハ必スヤ佛國輿論ノ大反	ニ於ケル佛國代表ノ態度ハ日佛協約ノ精神ニ悖ルモノタ
	カノ事情テ我ニ横車ヲ押シ極端ナ反日政策ヲ執ラントス	マス。此春下院テ右黨所屬ノ「ド、タスト」氏カ、聯盟
	ハ居ラヌノテ在リマシテ、若シ他日佛國ノ或内閣カ何等	又往々ニシテ佛國ノ内政々爭ニ利用セラレルコトカアリ
	アルトシテモ、佛國人ノ對日感情ハ少シノ影響モ受ケテ	セヌト大ナル誤算ヲ生スルノテ在リマスカ、對日問題ハ
	又之ヲ受ケ入レナケレハナラヌ内閣ノ政策カ假令如何テ	無イノテ、從ツテ帝國ノ對佛外交モ之ヲ念頭ニ置テ處理
	様ニ、目下佛國ノ下院テ多數ヲ制シテ居ル左黨側ノ政綱	ニ緊切ナル直接利害關係ノ無イ事項ニ付テハ自主外交ハ
	ノ血ノ中ニ潛ム反英感情ハ少シノ變化モ受ケテハ居ラヌ	スルヨリ外ニ致方カ無イ羽目ニ立ツテ居マスカラ、自國
	係カラ兩國ハ共同ノ步調ヲ採ツテハ居リマスカ、佛國人	《前ニ申述ヘマシタ通リ、佛國ハ英米ニ對シテ追從外交ヲ
	ハ未タニ英國人力好キニ成レマセン、政治的、外交的關	謗ノ聲ヲ聞キマシタ時ハ、誠ニ快心ノ極ミテアリマシタ。
	ト提携以來旣ニ三十年ノ星霜ヲ經テ居リマスカ、佛國人	「ルブラン」大統領ノロカラ、聯盟決議ノ無策ニ付テ誹
	サキソン」嫌ナノト好個ノ對象テアリマス、佛國ハ英國	トカ出來ルト存マスカ、四月六日長岡ノ招宴ニ臨席シタ
	的ニ如何トモ爲シ得ヌモノテ、佛國人力性來「アングロ、	帝國ニ對スル佛國社交界ノ空氣ハ大凡之ニ依ツテ窺フコ
	ノ血ノ中ニ沸ヒテ居ル感情ノ流レテアリマスカラ、人為	ツタ佛國代表ノ態度ヲ非議スル一端トモ云ヒ得ルノテ、
	マスレハ、佛國人ハ日本人力好キテアル、是レハ其國民	現ハレニ外ナラヌ、之ヲ他方面カラ見ルナラハ聯盟テ執
3	モ決シテ得ノ無イコトタト思ヒマス。長岡ノ觀測ニ依リ	様ナ小サナ原因ニハ非スシテ、全ク帝國ニ對スル同情ノ
2	佛國ノ政界ヲ挑發刺激スルノハ、我國ニ取リ損ハ在ツテ	如キ異例ナル多數ノ贊成投票ヲ得マシタノハ、決シテ此

一 外交政策一般

一 外交政策一般	
四尚最近歸任 セル蔣作賓公使力我方ニ對シ何等力期待又ハ 四尚最近歸任 セル蔣作賓公使力我方ニ對シ何等力期待又ハ 二 即シ 且將 來ニ於ケル 日支關係ノ調整上有效ナルモノナ ルニ於テ ハ 我方ハ之ニ對シ好意的考慮ヲ加フルヲ得策 下 リ米國ニ對シ我方ノ立場ヲ有利ナラシムル為準備的外交 工作ヲ爲ス必要アルノミナラス近時満洲問題ヨリ發生セル 同國人ノ對日悪感情ヲ融和シ又同國ノ對種東政策ヲ加フルヲ得策ト 「解ヲ遂クルコト得策ナリ而シテ我方ヨリ進ンテ彼ニ對シ イカ法ニヨリ同國トノ間ニ前記諸問題ニ付十分ナル相互的 ノ方法ニヨリ同國トノ間ニ前記諸問題ニ付十分ナル相互的 イ方法ヲ講スルコト得策ナリ而シテ我方ヨリ進ンテ彼ニ對ジ 勤蘇方策	 (欄外記入) oアーニ寫二部入手シ度 or一二寫二部入手シ度 or一二寫二部入手シ度 の在支公館ニ対スル轉電/件考慮アリ度 南本君 (別 電) (別 電) (別 電) (別 電) 本 省 10月25日後9時0分発 合第一九五二號 極秘 本 省 10月25日後9時0分発 合第一九五二號 極秘 本 省 10月25日後9時0分発 (別 電) (別 国) <li< td=""></li<>
日蘇両国関係ハ國体及建國ノ根本思想ヲ異ニシ融和シ難キモノアリ尚蘇聨邦ハ他國ニ間際アラハ之ニ乗シテ悪宣傳ヲ 、ステ肝要ナリ 、シテハ軍事外交其ノ他内外諸般ノ準備ヲ確立スルト共ニ りテハ軍事外交其ノ他内外諸般ノ準備ヲ確立スルト共ニ リアノ國際関係ニ鑑ミ此際ハ蘇聨トノ個三ハ國交ヲ開キ居リ がテ先ツ日蘇間ニ存在スル各種懸案ノ解決ヲ促進スルコト トシシニハ軍事外交其ノ他内外諸般ノ準備ヲ確立スルト共ニ リンニ為サレタル満洲國側ノ決定方針ニ基キ早目ニ之カ解決 シテ為サレタル満洲國側ノ決定方針ニ基キ早目ニ之力解決 リカートシ更ニ何等カノ方法ニ依リ極東方面ニ於ケル「ソ」 満國境ノ兵備ノ緩和ヲ講スルコト肝要ナリ 其他ノ諸國ニ對スル方策	依り此等諸國ニ対スル方策ヲ定ムルコト大要左ノ如シ 「満洲國ノ發達完成ノ為同國經濟統制及我國トノ經濟的調 「満洲國ノ發達完成ノ為同國經濟統制及我國トノ經濟的調 「満洲國ノ發達完成ノ為同國經濟統制及我國トノ經濟的調 二貢獻スルヲ要ス 二八取下ノ日支關係ヲ觀察スルニ北支地方ニ於テハ停戰協定 ノ成立以來漸ヲ逐フテ好轉ノ徴候ナキニ非サルモ具外的 キハ勿論ナルモ一般的ニハ彼ヲシテ反日政策ヲ放棄シ排日 現ニ存在スル各種具体的案件ノ解決ニ付テハ我方方針ノ 是正ナルコトヲ徹底セシメ彼ノ自覺反省ヲ促スニ努ムル り象ヲ與フルハ之ヲ避クルヲ要ス而シテ支那側ニシテ現 印象ヲ與フルハ之ヲ避クルヲ要ス而シテ支那側ニシテ現 印象ヲ與フルハ之ヲ避クルヲ要スニ がテハ我方亦之ニ相應スル好意的態度

34

アリ テ モ悪化セリ其主ナル國ハ英國ナルカ目下日印通商関係ニ就 帝 ル次第ナルカ故ニ成ルヘク同會議ハ之ヲ成功セシメ英國ト ノミナラス日本商品ノ海外市場進出ニヨリ經濟関係ニ於テ ノ間ニ経済関係ヲ調節シ両國ノ親善関係ヲ確立スルノ必要 ハ「シムラ」ニ於テ會商シ其ノ調節ヲ計ラントシツツア 國ハ満洲事変以来外國ヨリ危惧ノ念ヲ以テ迎ヘラレ 居 ル

固ヨリ望マシキ次第ナルモ之カ為メ欧洲問題ニ迄捲込マル ナル 植民地ヲ有スル関係上帝國ニ對シ相当危惧ノ念ヲ有シ居リ N 関聨シ同國ハ我方ニ接近セムトスル模様アリト傳ヘラレ 次ニ独逸ハ最近軍縮會議及聨盟ヨリ脱退ヲ敢行セ ス従テ此等條約ノ批准 シ先方ノ危惧ヲ除去セル シ處現内閣ニ於テ蘭國ト ト共ニ其ノ相手國タル佛國ニモ亦我ニ接近説アリト カ如キコトハ厳ニ之ヲ避クルノ必要アリ尚和蘭ハ東洋ニ ガ帝国トシテハ欧洲諸國ト親善関係ヲ持續スルコト ハ成ルヘク速ニ之ヲ進ムルコト コトハ誠ニ結構ナル事ナリ ノ間ニ仲裁裁判及調停条約ヲ締結 ールカ ト 1 -思考 石ニ コト ト致 之 ハ

(欄外記入)(付記一)

36

爲我國策トシテ確立スルヲ要スル主要關係國ニ對スル外交 ニテモ我與國ノ多カラムコトヲ策スルヲ以テ基調トシ之ガ 今後ノ外交ハ嚴ニ斯ノ如キ情勢ノ招來ヲ豫メ防止シ且一國 國ノ最苦痛トスル所ナリ又此ノ際蘇支兩國ニ對シ强テ我ヨ 國ノ態度ハ固ヨリ其ノ他各國ノ態度趨向自ラ明カニシテ帝 若シ米英兩國聯合シテ我ニ當ルガ如キコトアラムカ蘇支兩 雖就中諸外國トノ關係ヲ調整シ以テ帝國有事ノ際ニ於ケル 併行シテ内外諸般ノ政策ニ於テ着々措置スヘキモノ多シト 來ルヘキ國際危局ニ處シ且之ヲ突破スベキ方策トシテハ單 施策ノ綱要左ノ如シ リ事ヲ構フルガ如キモ右ノ情勢ヲ誘致スル公算大ナリ卽チ 外歴ノ範圍ヲ極力縮少スルコト最緊要ナリ而シテ此ノ場合 ニ軍備ノ充實ノミニ依リ十全ヲ期シ難キハ勿論ニシテ之ト 今後ノ國際情勢ニ對スル帝國外交ノ基調ニ關 シ所 筧

|、 滿洲國ニ對シテハ既定國策ニ基キ速ニ建設事業ヲ完成 且帝國ノ國防上密接關係アル産業、 ヲ促進ス 交通竝ニ資源ノ開發 2

二、米國ニ對シテハ我ヨリ進ンデ事ヲ構フル コ \mathbb{P} ナキハ勿論

彼ヲシテ一層我對滿對支政策ヲ諒解セシメ親善關係ノ保 ニ出デ來ルニ於テ 持ニ努ムト雖彼ニシテ我國策ノ根本ニ反スル積極的態度 ニ遺憾ナキヲ期ス ハ斷乎之ヲ排撃スル コト トシ其ノ準備

(註 日米仲裁裁判條約及調停條約 見地ニ於テ深甚ノ考慮ヲ要ス ノ締結ノ如キハ右ノ

三蘇國ニ對シテハ極東ニ於ケル其ノ野望ヲ制スル爲我軍備 國ノ關心ヲ東方ヨリ南方ニ轉ズル如ク誘導ス ニ努メ以テ兩國間ニ於ケル諸懸案ノ解決ヲ期スル一方同 我當面スル國際的危局突破ノ方策トシテ親善關係 上遺憾ナキヲ期スト雎我ヨリ進ンデ事ヲ構フルヲ避ケ且 いノ保持

(欄外記入)

五大臣会議ノ席上海軍大臣ノ朗読セラレ

タ ル分

떤 支那ニ對シテハ依然嚴格ナル態度ヲ以テ臨ミ各政權ヲシ 米支兩國ノ提携ヲ不可能ナラシム 終局ニ於テ同國ヲシテ帝國ノ國策ニ追從シ來ラシメ以テ テ實質的ニ親日態度ヲ持セシムル爲所要ノ工作ヲ續行シ

二、對外國策ノ大綱ハ旣ニ昨年八月閣議ノ決定ヲ經タル

アリ根本的ニ之ヲ改ムヘキ情勢ノ變化ナシ唯タ皇國

盟離脱及歐米諸國ノ國勢ニ多少ノ變化アリタ

Ξ

豫察セラレ

タル處タリ故ニ之ニ基キ多少

 ν

ハ 足レ IJ

一、國策ハ各省業務實行上ノ指針

トシテ國務大臣ノ審議ニ

Ξ

十月二十日五相會議ニ於ケル

陸軍側提示

リ決定ス

(付記二)

五英國ニ對シテハ親善關係ノ持續ニ努ムト雖モ同國 スル願念竝ニ歐洲政局ノ複雜困難ナル關係ヲ利用シテ以テ豫メ之ニ備ヘ其ノ東洋ニ於ケル殖民地及既得權益ニ對 經濟政策及東洋政策上我ト衝突スル公算尠カラザルヲ以英國ニ對シテハ親善關係ノ持續ニ努ムト雖モ同國ノ世界

外交政策一般

テ同國ヲ牽制ス

六佛、獨、伊三國ニ對シテハ歐洲ニ於ケル複雜機微ナル 係ヲ巧ニ利用シ各國ノ立場ニ於テ努メテ親善ヲ保チ以テ 關

英、蘇ヲ牽制スルニ資ス 2 日

就中佛國ニ對シテハ東洋ニ於ケル利害關係ヲモ利用

佛提携ノ具体的協商ヲ策ス

ノ修正ヲ加

フ

ル

そ當時既

シ聯

モ

帝國ハ満洲國建設ニヨリ世界ニ大ナル波紋ヲ惹起シタル次第ナ スルコト大要左ノ如シ の、 マックににた依り其全部ナラストモ出来得ルタケ多クヲ我方 アをした。 「ノ三ナルカ」此等ノ國ハ将来或ハ『國際會議等ニ於テ』互ニ 「シーナルカ」此等ノ國ハ将来或ハ『國際會議等ニ於テ』互ニ 「シーナルカ」此等ノ國ハ将来或ハ『國際會議等ニ於テ』互ニ 「シーナルカ」此等ノ國ハ将来或ハ『國際會議等ニ於テ』互ニ 「シーナルカ」此等ノ国ハ将来或ハ『國際會議等ニ於テ』互ニ 「シーナルカ」此等ノ国ハ将来或ハ『國際會議等ニ於テ』互ニ 「シーナルカ」此等ノ国、将来或ハ『國際會議等ニ於テ』互ニ 「シーナルカ」」 「シーナルモノノ中主要ナルモノハ支那蘇聯邦及米國 「シーナルフラー、 「シーナルモノノ中主要ナルモノハ支那蘇聯邦及米國 「シーナルフ」 「シーナー、 「」、 「シーナル」 「」、 「」、 「」、 「」、 「」、 「」、 「」、 「」、 「」、 」、 」、 「」、 」、 」、 」、 「」、 」、 」、 」、 」、 」、 」、 」、 」、 」、 、 、 、
『 」内ヲ『次テ英國ナルカ』ニ改ム 『 』内ヲ削除ス 『 』内ヲ削除ス 『 』内ヲ削除ス

外

務

省

案

陸

軍 省 修 Æ

案

外交事項

(五相會議

Þ

決

苟モ我ニ於テ両國関係ノ改善ヲ焦ルカ如キ印象ヲ與フルハ之コトヲ徹底セシメ彼ノ自覺反省ヲ促スニ努ムルト共ニ其ノ間存在スル各種具體的案件ノ解決ニ付テハ我方方針ノ是正ナル運動ヲ根絶セシムル為常ニ嚴粛ナル態度ヲ以テ之ニ臨ミ現ニヘキハ勿論ナルモ一般的ニハ彼ヲシテ反日政策ヲ放棄シ排日三「「從テ」我方トシテハ前記北支地方ノ好轉機運ヲ『助成』ス	「満洲國ノ發達完成ノ為同國経濟統制及我國トノ経濟的調節ヲ 「>> 「>> 「>> 「>> 「>> 「>> 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、
ヲ助長强化』ヲ加フ『助成』ヲ削リ『利用シ北支那ニ於ケル各政権ノ對日関係轉向『跋成』ヲ削リ『利用シ北支那ニ於ケル各政権ノ對日関係轉向	 「對日政策ノ實質的轉向ヲ助長强化シ満洲國ノ健全ナル發達トス 一、對日政策ノ實質的轉向ヲ助長强化シ満洲國ノ健全ナル發達トス 一、方策トス 二、内ヲ左ノ如ク改ム 「」内ヲ左ノ如ク改ム 「」内ヲニ「然ルニ」ヲ加フ 「」内ヲニ「然ルニ」ヲ加フ 「」内ヲニ「然ルニ」ヲ加フ 「」内ヲニ「た」の次第トシテの激化ヲ避ケ酸化 「」」の第七、「シテン・ 「」」 「」、 「」

39

38

 \sim

三、對外國策ニ伴フ對內國策ハ未タ確立セラレアラス國家ノ 憂ハ此ニ存ス

四、對外國策ノ修正案及其理由書 ㅈ 玆 = 一提出 ス

大方針ヲ審議決定シタ ハ 夫レ夫レ事務當局ニ於テ研究審議スル N 後過般來提示セラ コ v ٢ ŀ タ ル 乜 等 ハ 可ナ Ż 案

(付記三)

Æ,

N

 \sim

シ

ル

處

1

如

3

此

、對外國策 キ時機ニ於テ更ニ要望ヲ縷述スル 大綱ヲ述ヘタルモ重ネテ關係各閣僚ト ニ併行スル 對内國策ニ就テハ過般ロ 事 1 ス 共ニ研究審議ス 頭ヲ以テ其

和八年十 弐捨部 1 、内第八號 月三十日

昭

マル司以テロの 「従テ先ツ日蘇両國関係ハ國體及建國ノ根本思想ヲ異ニシ融和シ アルラ以テ日蘇西國関係、國體及建國ノ根本思想ヲ異ニシ融和シ アルラに、 なたた、 、 た陸ニ於ケル利権獲得ニ付解決ノ 北海鐵道買収ノ如キモ帝國政府ノ閣議決定ノ通リ我方トシテハ 「従テ先ツ日蘇間ニ存在スル各種懸女」 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、		来國正對シ我方ノ立場ヲ有利ナラシムル為準備的外交工作ヲ為 ス必要アルノミナラス近時満洲問題ヨリ發生セル同國人ノ對日 来國ニ對シ我方ノ立場ヲ有利ナラシムル為準備的外交工作ヲ為 ル為何等カノ具體的方法ヲ講スルコト必要ナルヘシ	對米方策 おハ之ニ對シ好意的考慮ヲ加フルヲ得策トス 将来ニ於ケル日支関係ノ調整上有效ナルモノナルニ於テハ我 等ヲ申出ツルコトアル場合右申出ニシテ東亜ノ大局ニ即シ且 四尚最近帰任セル蒋作賓公使カ我方ニ對シ何等カ期待又ハ希望	我方亦之ニ相應スル好意的態度ヲ執ルヲ可トスヲ避クルヲ要ス而シテ支那側ニシテ現實ニ誠意ヲ示スニ於テハ
為シノ下ニ「陰謀ヲ金テ」ヲ加フ 「 」内ヲ「萬一ノ場合ニ善處スルノ準備ナカルヘカラス而シ テ満洲國ノ建設ト共ニ日蘇関係ハ相當ノ危機ヲ藏シ居ルモノト 認メラル、處帝國當面ノ急務トシテ満洲國ノ健全ナル發達ヲ計 ルノ必要アルヲ以テ」ニ改ム 「留蘇間ニ存在スル各種懸案並其他日蘇、満蘇間ニ發生スルコ 「日蘇間ニ存在スル各種懸案並其他日蘇、満蘇間ニ發生スルコ トアルヘキ紛争問題ニ就テハ満洲國ノ建設ニ伴フ對蘇壓力ヲ活 トアルヘキ紛争問題ニ就テハ満洲國ノ建設ニ伴フ對蘇壓力ヲ活 トアルヘキ紛争問題ニ就テハ満洲國ノ建設ニ子丁 「其他」ノ上ニ「英及」ヲ加フ	ナリ 廢棄ニ至ル場合ヲ顧慮シ極力英米離反策ヲ考慮シアルコト肝要	教保約ニ因ル不利ナル拘束ヲ脱却スルコトニ努ムルト共ニ條約 対、加二於テハ萬一三億スル諸般ノ準備ヲナスト共ニ係約 シテ今後ノ情勢ヲ有利ニ導ク如ク外交工作ヲ進メ以テ華府及倫 シテ今後ノ情勢ヲ有利ニ導ク如ク外交工作ヲ進メ以テ華府及倫 フルニ於テハ斯爭排撃セサルヘカラス スルニ於テハ斯手排撃セサルヘカラス スルニ於テハ斯手排撃セサルヘカラス スルニ於テハ、萬一三應スル諸般ノ準備ヲナスト共ニ公正ナル 米國ニ對シテハ萬一ニ應スル諸般ノ準備ヲナスト共ニ公正ナル 米國ニ對シテハ萬一ニ應スル諸般ノ準備ヲナスト共ニ公正ナル	削 除	リ支進出ニ對シテハ適當ノ手段ニヨリ之ヲ阻止スルコト必要ナル限リ過早ニ之ヲ支持セサルヘキハ勿論其勢力ノ擴大特ニ北ル限リ過早ニ之ヲ支持セサルヘキハ勿論其勢力ノ擴大特ニ北鑑ミ彼等カ眞ニ日支提携ノ必要ヲ痛感シ之ヲ事實ニ披瀝セサ而シテ現國民党政権ハ本質的ニ帝國ト相容レサルモノアルニ三ノ二項トシテ左ノ如ク加フ

本水ルマシストラ (1) 「1) 「満洲國ノジン 「満洲國ノジン 「1) 「満洲國ノジン 「満洲國ノジン 「1) 「満洲國ノジン 「満洲國ノジン 「1) 「満洲國ノジン 「1) 一般ニケルヲ要スノ 「2) 一般ニケルヲ要スノ 「2) 一般ニケルヲ要スノ 「2) 一般ニケルヲ要スノ 「2) 一般ニケルヲ要スノ 「2) 一般ニケルヲ要スノ 「2) 一般ニケー般 「2) 「一般ニケー酸 「1) 「満型 「2) 一般ニケー酸 「2) 「一般ニケー酸 「1) 「一般ニケー酸 「2) 「一般 「1) 「1) 「満型 「2) 一般ニケー酸 「2) 「1) 「1) 「1) 「満型 「2) 一般 二人 「2) 「2) 一般 二人 「2) 一般 二人 「2) 一般 二人 「2) 一般 二人 「2) 一般 二人 「2) 一般 二人 「2) 一般 二人 「2) 一般 二人 二人 「2) 一般 二人 二人 一、 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	1 「帝國ハ滿州國建設ニヨリ世界ニ大ナル波紋ヲ超起」シタル を第ナルカ今日ノ急務ハ先ツ満州國ノ健全ナル發達ヲ2「計 「大」加シテ滿州事變ニヨリ國交關係ノ確立ヲ圖ルヲ5 「大」の支那蘇聯邦及米國6「ノ三」ナルカ此等ノ 「主要テルモノハ支那蘇聯邦及米國6「ノ三」ナルカ此等ノ 「三」ナルカ此等ノ」 「一九三五年前後ニ於ケル國 「一九三五年前後ニ於ケル國 「日二」 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ」 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ 「一九三五年前後ニドノノ」 「一九三五年前後ニドノノ 「一九」 「一九三五年前後ニドノノ 」 「一二」 「一一二」 「一二」 「一二」 「一一二」 「一一二」 「一二」 「一一二」 「一二」 「一一二」 「一一二 「一二」 「一一一三 「二」 「一一一一 「二」 「一一一一 「二」 「一一一 「二」 「一一一 「二」 「一一一 「二」 「一一一 「二」 「一一一 「二」 「一一一 「一一一 「二」 「一一一 「二」 「一一一 「一一一 「一一一 「二」 「一一一 」 「一一 「一一	(付記四) (付記四) (付記四) (付記四)
21 「 」内ヲ「 二 」内ヲ「 二 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	5 4 3 2 1 「這般ノ滿州屋ノ如ク改ム 「我國力充實ニ資スルト共ニ」」 内ヲ「捉進シ」ト改ム 「ト共ニ帝國國策遂行ノ障害排除ニ必要ナル諸般ノ準備 ヲ完	「 」内ヲ左ノ如ク改ム 「 」内ヲ左ノ如ク改ム 「 」内ヲ左ノ如ク改ム

ノ相手國タル佛國ニモ亦我ニ接近説アリ3「トノコトナルカ」シ同國ハ我方ニ接近セムトスル模様アリト傳ヘラレ之ト共ニ其ルカ故ニ成ルヘク同會議ハ之ヲ成功セシメ英國トノ間ニ經濟關係ヲ確立スル2「ノ必要アリ」是化セリ其主ナル國ハ英國ナルカ目下日印通商關係ニ就テハレミナラス日本商品ノ海外市場進出ニヨリ經濟關係ニ就テハ東国1「ハ滿洲事變以來外國ヨリ危惧ノ念ヲ以テ迎ヘラレ居ル其他ノ諸國ニ對スル方策	田要ナリ」 田要ナリ」 田要ナリ」 田要ナリ」 田要ナリ」 日本スル各種懸案ノ解決ヲ促進スルコトトシ更ニ何等カノ 七次定方針」ニ基キ早目ニ之カ解決ヲ計ルコトトシ ・一、権変、方面ニ於ケル「ソ」 満國境ノ兵備ノ緩和ヲ講 4、2、日本、 日本スル各種懸案ノ解決ヲ促進スルコトトシ北満鐡道 日本スル各種懸案ノ解決ヲ促進スルコトトシ北満鐡道 日本スル各種懸案ノ解決ヲに 日本ス・ 日本、 5、4、2、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1	新トハ町をヲ整クレコト亟メテ干要ナリ従テたソコダンコト、国をヲ整クレコト、国人、国際関係ニング、国際には、「「「「」」」、「「」」、「」」、「」、「」、「」、」、「」、」、「」、」	日蘇兩國關係ハ國體及建國ノ根本思想ヲ異ニシ融和シ難キモノ	か為の支援した。 おののののでは、 おのののののののののののののののののののののののののののののののののののの
1「 」内ヲ左ノ如ク改ム 1「 」内ヲ左ノ如ク改ム 1「 」内ヲ左ノ如ク改ム 1「 」内ヲ左ノ如ク改ム	3 「 」内削除 「シ他方同國ノ關心ヲ東方ヨリ南方ニ轉スル如ク誘導スルコ 」内ヲ左ノ如ク改ム 」 」内削除	2 1 「 」内ヲ「加ヘサルヘカラサルモ」ト改ム		 「滿洲事變以來激化セル米國ノ對日惡感情ハ多少鎮靜シタル現 、二帝國ハ我ヨリ進ンテ米國ト事ヲ構フルノ意圖ナキハ勿論ナル モ彼ニシテ我國策ノ根本ニ反スルヲ要ス右ノ趣旨ニ基キ國防上我ヲ拘 、たがテハ斷乎トシテ之ヲ排撃スルヲ度ス右ノ趣旨ニ基キ國防上我ヲ拘 、ニシテ一九三五年海軍軍縮會議準備工作ノ素地ヲナスモノナリ 、シテ一九三五年海軍軍縮會議準備工作ノ素地ヲナスモノナリ 、シテ一九三五年海軍軍縮會議準備工作ノ素地ヲナスモノナリ 、ルニ於テハ斷乎トシテ之ヲ排撃スルヲレラ協に二帝國」後東政策ニ因 、加對米工作ハ特ニ愼重ノ態度ヲ執リ我立場ヲ確保シ且旣存 、加對米工作ハ特ニ愼重ノ態度ヲ執リ我立場ヲ東縛セサル如 ク警戒ヲ要ス

トリ利太側キ存ハ他可計モヘ方ノア

45

ノシ次係ル」要ノ帝

國策ニ追從シ來ラシ

四

「ハ之ヲ」

、避クル

メ以テ米支提携ヲ不可能ナラシムルヲ要ス」「執リ終局ニ於テハ各政權ヲシテ帝國ノ國策「 」内ヲ左ノ如ク改ム

4

, ル 二 局 ス 期 待 又

テ郎ハ ハシ希我且望

Ħ

	│ 必要アルヲ以テ今後トモ情勢ノ推移ニ留意セラレ度	最惡ノ場合ニ帝國ガ軍縮會議ニ殘留スルハ到底之ヲ許サザ
17	政局其ノ他諸般ノ事情ヲ考慮ヲ要スルガ如キ場合ニハ	ヲモ覺悟セザルベカラザル事態ニ立至ル懸念ナシトセズ右し、リ極メテ不利險惡ナルベク最惡ノ場合規約第十六條ノ適用
	縮會議ニ留マルモノト御承知	~ 退スルノ事態ヲ生起スル場合ニ於ケル國際環境ハ帝國ニト
	ルモノナルニ付目下ノ所前述最悪ノ場	~ 日支問題ニ關聯シ帝國ガ國際聯盟ト正面衝突ヲ爲シ遂ニ脱
	義ノ事業ソノモノニハ帝國政府ニ於テ今後ト雖モ劦力ヲ昔責ヲ帝國ニ嫁セラルルガ如キハ避クベキノミナラズ軍縮會	2 貴電軍第三二〇虎ニ閖ン(111)第二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十
	ノ軍縮會	+ 本省1月12日発
	ヲモ加ヘテ世界恒久平和確立ノ崇高ナル基礎觀念ニ據レル	き請訓
	會議ノ性質ハ純然タル聯盟ノ機構ノ内ニ止マラズ非聯盟國	連盟脱退後における軍縮会議残留の可否につ
	揚ニ付テハ特ニ愼重ナル考慮ヲ要スルモノト認ム本來軍縮	
	照アリタシ)ヲ見ルコトアリトスルモ帝國ノ軍	付 記 昭和七年十二月二十日発ジュネーヴ一般軍縮,
	タル時局處理方針及聯盟代表宛客年往電第四九號ノ第三項イーナ塾フヨーイニニ塾ジムラロシンク層隊隊伊部上手	延星肥道の城名にまして4軍務会議に死骨すべき旨回訓
	「二.九虎ら戸一二二二虎ヲ以テ申重ジタレ國祭뢺系ヨ)見國ノ聯盟脱退(本件ニ關シテハ長岡大使ダ客年往電合第一	
	^ 浠昱兒長	5 昭和8年1月12日 ジュネーヴー般軍縮会議全権宛(電報)
		二 国際連盟一般軍縮会議
		<
	トス」 キ用シテ我ニ有利ナル情勢ニ導ク如クジリ溌買電約で調査では、	
	「武武治宮境・周系ケレ諸國」、教授院的勢力ノ進出ト親交ノ、對米反感及同方面ニ於ケル英	
	ス」 道當ナル外 な 、 濠洲	
	利用シ巨使携捜ノ具体的話で	<u>6</u>
	牽 牽 血 	ハ成ルヘク速ニ之ヲ進ムルコトト致度」、成ルヘク速ニ之ヲ進ムルコトト致度」、たセルコトハ誠ニ結構ナル事ナリト思考ス從テ此等條約ノ批准於テ蘭國トノ間ニ仲裁裁判及調停條約ヲ締結シ先方ノ危惧ヲ除有スル關係上帝國ニ勤シ相當危惨ノ急ラ有シ尼リシ岌毋P降ニ
46	別政局ノ複雑性ヲ利用シテ同國ノ行動ヲ牽制スルコト肝要ナシ且東洋ニ於ケル同國殖民地及既得權益ニ對スル顧念竝ニ歐聯合ハ帝國ノ最モ不利トスルトコロナルヲ以テ極力之ヲ阻止	、副会に訪るに対しています。「「」、小殿に立ていた」で、「「」、小殿に之ヲ避クルノ必要アリ5「尙和蘭シキ次第ナルモ」之カ爲メ歐洲問題ニ迄トシテハ歐洲諸國ト親善關係ヲ持續4「

二 国際連盟一般軍縮会議

47